
ああっ女神さまっ 「愛しき鈴の音」 外伝

天 空我

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ああっ女神さまっ 「愛しき鈴の音」 外伝

【Nコード】

N2351M

【作者名】

天 空我

【あらすじ】

外伝ではおもいつきり遊んでみました。仮面ライダー電王とのクロスオーバー、「時の列車」次作も構想があります。

時の列車 前編（前書き）

仮面ライダー電王とのクロスオーバーです。電王が好きな人はあまり読まない方がいいかも

時の列車 前編

時の守護神。

過去を司る女神ウルド。

現在を司る女神ベルダンディー。

未来を司る女神スクルド。

三人の女神はもともとは「ノルン」と呼ばれる大神であった。はるかなる太古。時間という概念が生まれたばかりの頃。

「ノルン」は時の管理をするために自分を三つに分けたのである。なぜ分けなければならなかったのか。それはひとえに「ノルン」の力が強大すぎたから。

存在するだけで多次元宇宙に影響を及ぼすのだ。

「重力の強い星の周りでは光すら直進できない」

これの大規模なことが多次元宇宙の間に起きるのである。

ゆえに、「ノルン」は同じ大神「ヒルド」^{シンク}「星歌」を介して自分を三つに分け、時の管理を始めた。

しかし。

「ある事情に」より、三女神達は「ノルン」に戻らざるを得なかった。

もちろん、完全に融合したのではなく短時間でまた元の三女神に戻ったのだが。

短時間。

なんともはや時間の概念のあやふやなことであろうか。

「ノルン」に戻った影響は次元を揺らし時空を揺らした。

そして――

空にはオーロラとも虹ともつかない光彩が煌いている。

昼なのか夜なのか。明るさからすれば白夜に等しいぐらいだ。

荒涼とした砂と岩ばかりの大地を疾走する列車。白い車体が大気を切り裂いて進んでいく。

「良太郎ちゃんお久しぶり！」

デンライナーの客室乗務員ナオミはいつもの笑顔で迎えてくれた。両腕と両足首には大量の腕時計を装い、髪は1束だけ赤いメッシュが施されている。奇抜な格好だが、それも乗客の顔ぶれを見れば霞んでしまう。

「よお、良太郎！」

真っ赤な怪人が片手を挙げて彼に挨拶をした。色の濃淡や色合いこそあれ何処もかしこも赤、赤、あかだ。おまけに頭に二本の角。真っ黒な目だけが印象的だった。平たく表現するなら赤鬼か。

「モモタロス元気だった？」

「ああ……まあな、あれ以来戦いがないから退屈でしょうがないぜ」
「贅沢ゆうたらあかん」

食堂車の進行方向右側の中ほどの席に一人で陣取っている金色の怪人がなぜか関西弁でしゃべった。

「モモタロス」と呼ばれた怪人よりも体格は一回り大きい。金色と黒で頭から一本の角を生やした、白いボアのついたベスト。まるで木こりのようないでたちだが、全体から受ける印象は、後足で立ち上がった熊だ。

「平和なのが一番や」

「そうそう。その意見は僕も同じだね。拳など使わないでいられるならそれが一番だよ」

金色の怪人——「キンタロス」の後ろの席で文庫本を読んでいた、これまた真っ青な怪人、「ウラタロス」が同意した。亀の甲羅のよくな造作の青い顔はどこか人を食ったような印象を受けた。

「キンタロス」とは通路を挟んだ席に座る、濃い紫色の怪人が立ち上がった。

踊るようなステップで——実際に踊っているに等しいのだが——良太郎に近づく、彼の前でくると回って、良太郎の手を取った。「でも、ほんとに久しぶり」

彼は少し変わっていて頭にヘッドホン、頭頂から後ろに伸びた突起からまるでポニーテールのように一条の髪の毛が流れていた。高い襟のついたちっと見ると「悪魔」みたいな感じを受けるが、彼は竜Ⅱドラゴンを象っているようだ。

彼らはイマジンと呼ばれる未来からやって来た人類の精神体だ。人間のイメージⅡ記憶により怪人としての肉体を得て姿をとる。過去を都合の良いように改竄し、現在や未来を変えることを最大の目的とする。筈なのだが……いろいろとあって良太郎と共に戦い、今はデンライナーの住人だ。

「半年ぶりぐらいかな。リュウタロス。キンタロスもウラタロスも元氣そうで何よりだね」

そう答えたのは、風が吹けばそのまま飛ばされていってしまいそうなほど頼りない、線の細い感じの青年。

「野上良太郎」

かつて「電王」として時を守護し守り抜いた勇者。とはとても思えないほどの頼りなさだ。もちろんそれは彼一人の力ではなく、多くのよい仲間に使まれた結果であるのだが。

十歳ぐらいの少女がモモタロスの前の席に座っている。

「コハナ」

「電王」という物語の鍵となっていた女の子。濃い栗色の癖のない髪は眉毛のあたりで綺麗に切りそろえられて胸元まであった。可愛いのだけれど気の強そうな面立ちだ。

「ミルクデッパのほうはどうなの」

「うん、相変わらずだけど何とかやってるよ」

カイを倒してから半年。

相変わらず——良太郎の運の悪さは折り紙つきを通り越してギネス級だった。幸い電王に変身している時はなりを潜めていたが、普

通の生活の戻った途端、まるで今までの反動のように「不運」が襲ってきたのだった。

今は姉の愛理の喫茶店「ミルクデッパ」を手伝いながら暮らしている。

「今日は急にどうしたの？」

会いにきてくれたのは嬉しいけれど。

「いや、僕のほうが聞きたいよ。朝起きたら机の上にパスが乗ってたんだ」

その場にいた一同の視線が食堂車のカウンターに一番近い席に座る人物に集まった。

オーナーと呼ばれるデンライナーの主——管理者が席に座っていた。目の前のテーブルには大きなお皿に盛ったピラフの山に旗が立っている。

「オーナー？」

コハナの問いかけにも悠然とスプーンを動かしている。

「いや……実はですね、ターミナルの駅長から連絡があったのですよ」

「連絡って？」

「大規模な時空振動の前触れを観測したので気をつけるようにと」

「時空振動ってなんだ？」

首をかしげるモモタロスにウラタロスがまぜっかえす。

「先輩は頭が悪いんだから無理に考えなくてもいいと思うけど」

「なんだとお、この亀野郎！」

「やめなさいってばっ！」

コハナの掌低と肘撃ちで赤青のイマジンは床の上で悶絶した。

「まあ、簡単に言う地震のようなものです。これに巻き込まれたら何処の時間に放り出されるか。いいえ、まったく別の世界に……」
オーナーのスプーンがピラフの山をとりわけていく。旗は今にも倒れそうだ。

「飛ばされるかもしれません」

「だったら、列車の運行をとめたほうがいいんじゃないの」
ウラタロスのもっともな意見だが。

「いいえ、それは出来ません。デンライナーの使命は乗客を運ぶことだけではなく、時の運行が正しく行われているか監視の役目もあるのですから」

もっとも、今の乗客はイマジンと良太郎だけなのだけれど。

「それにしたって、命あつての物種ってこともあるんだし……」

モモタロスは小馬鹿にしたように。

「ふん、相変わらずチキンなハートしてやがるぜ、カメタロスはよっ」

「慎重だつて言って欲しいね」

くるりとモモタロスに背中を向けた。

あ、でも、先輩の頭じゃ慎重の意味わかんないか。

わざわざ聞こえるようにだから、これは挑発以外のなんでもない。

二人のイマジンはコハナの拳が固められるのを見て、思わず後ろに下がった。

「とっ、ともかくだなっ」

上ずったモモタロスの台詞。

「俺達には良太郎がいる。こいつがいればどんな相手だろうと目じやないぜっ」

「とはいえ、相手が相手だけにいくら電王でも」

皮肉っぽく口の中でぶつぶつとウラタロス。

ナオミは淹れたばかりのコーヒーをイマジン達に配りながら。

「でも、何処の時間に飛ばされるか、別の世界に飛ばされるかもしれないんでしょう？ だとしたら電王の力が必要になることだってあるかもしれないじゃないですか」

「そのとおりです。物事には万全の体制でのぞむべきです。ですの
で私としては良太郎君を呼んだ次第」

「判りました。オーナー。何が出来るか判らないけど出来るだけ頑張ってみます」

こんな時の良太郎は見違えるほど頼もしく見える。

「――どうやら、早速来たようですよ」

頷いた言葉が終わらないうちに。

下から突き上げるような振動。

一瞬の浮遊感の後、良太郎は食堂車の天井に頭をぶつけた。

失神。

いいお天気でよかったわ。

ベルダンデューは、洗濯物の最後の一枚を干して、天空を仰いだ。梅雨の晴れ間。四日ほど続いた雨がようやくやんで、快晴とまでは行かないが、空が七で雲が三ぐらいだ。ボディビルに通い詰めたような雲の高さが、梅雨も終わりが間近なのを告げている。

初夏の日差しの中でポニーテールが緩やかに揺れる。

溜まっていた洗濯物も片付けることが出来たし掃除も済んだ。廊下の床などはぴかぴかで顔がうつりそうだ。

後は簡単な繕い物をしたら、夕食の買い物に出掛けよう。

休暇で地上界に降りてきているリンドが愛娘の愛鈴を連れて母屋から声を掛けてきた。

リンドは相変わらぬ白い戦闘服だ。休暇なんだからたまには別の物を着ればいいのに。

「ベルダンデュー、二人で散歩に行つて来る」

最愛の人、螢一との間に生まれた娘は今年十歳になる。

艶やかな煌めきを放つ黒髪を赤く細いリボンで頭の両脇に留めている。小作りの卵形に整った輪郭。色白の肌に黒く大きな瞳がとても印象的だ。知的な顔立ちだが少しも小生意気な印象を受けない。むしろ、優しく微笑みかけたくなるそんな面立ちだ。体格は現在の小学生のレベルだと少し小柄なほうだろう。

半袖チェックのカッターシャツと濃紺のスラックス。おんなの子女の子した可愛らしい服装よりも、動きやすくて行動的な物を彼女は好んでいた。

「はい。夕ご飯までには戻って下さいね」

「了解した、間違はなく帰還しよう」

リンドのいかにも戦闘部らしい口調。隣で愛鈴が少し苦笑している。プライベートの時でもこんな感じでしゃべるのだ。そんな女神だと割り切ってしまうばいいのだろうけれど、どうにも他人行儀でいけない。本人はどう思っているのだろうか。

それでも初めて他力本願寺に降りてきた時に比べるとずっと明るくなったように思う。

ベルダンディーは風が気持ちいいので縁側にソーイングセットを持ち出した、解れている螢一の作業服のズボンの裾を直してしまうと、買い物籠を片手に車庫へ。「ベルダンディーお買い物スペシャル」と名付けられた愛車は一路商店街に向かっていった。

一級神特務限定リンド。二級神一種限定アイリン。この二人が組むと散歩でもちよつとただではすまない。沖縄や北海道にだって平気で足を伸ばす。下手をすると数分後には地球の裏側にいることだってある。

しかし、今回は他力本願寺の北側に広がる森で済むようだ。森の中ではなく木々の梢のはるか上空に二人は浮いていた。二人ともステルス状態にあるので普通の人間に目撃される心配はない。

「この辺りでいいでしょうか」

「そうだな」

振り返った愛鈴にリンドは頷いた。

愛鈴の衣装が普段着から戦闘服に再構成された。ベルダンディーの戦闘服とほぼ同じだが構成している色はピンクと白だ。細かい装飾は少し違っているが。

空中から柄の長い戦斧を取り出すリンド。

呼応して愛鈴も空中から一メートル半ぐらいの金色のロッドを取り出した。

「ではリンド」

「うむ」

「いきます！」

声と共に愛鈴の姿が消えた。

同時にリンドの姿も。

二人の間の空中から得物が打ち合う美しい音がした。

辺りの空中から立て続けに同じ音がした。

二人のスピードがあまりにも速すぎるため、人間の視覚では追いきれない。音速を超えた戦闘は木々の梢を揺らし、葉を引きちぎった。

「くっ、」

さすがに戦闘ではリンドにまだまだかなわないようだ。

一瞬の隙を突かれてリンドの姿を見失ってしまった。

狼狽と動揺。

首元に戦斧の切っ先が突きつけられた。愛鈴の右側から戦斧のリーチを生かして、今にも刃先が首に触れそうな距離でとめていた。

「一本だな」

リンドの表情のない顔。冷静に戦いを分析する戦士の顔だ。

「ですね、私の負けです」

「相手の位置がわからなくなったら自分の位置を変える。教えただろう」

「すみません、なかなか難しいですね」

「愛鈴、戦闘においてもっとも大切なのは何だ？」

「相手の攻撃ポイントの予測」です」

「よろしい」

リンドの優しい手が愛鈴の頭に添えられた。

無表情な鉄面皮は消えて花のような微笑がリンドにはあった。厳しいだけではない——師匠であった。

愛鈴は優しく頭をなでられてくすぐったそうにしている。

「では次だ」

距離をとって再び互いの得物を構えなおした。

音速の戦闘が繰り返された。

動き回る時に生じる衝撃波だけではなく、ぶつかりあう神気が気圧変化を起こして、無秩序な突風が吹き荒れる。

一瞬の隙も許されない状況の中。

二人の上空のある一点が虹色の歪みを見せた。二階建ての家一軒ほどの大きさの中心から、巨大な「物」が現れた。

空気抵抗を考慮した流線型の先頭車両。鮮やかな赤そして黒。白を貴重とした客車が後に続いている。本来ならデンライナーが運行するときには自動的に線路が敷設され、撤去されていくのだが、どうしたことか今回はそれがなかった。

先頭車両が斜めに傾いだまま森の木々を薙ぎ倒していく。墜落、電車にこの表現はおかしいかもしれないが、のたうつ大蛇のように巨大な車体が大地を抉り取り、一キロ以上もの傷跡を残してようやく停止した。

照明が消えてしまつて薄暗いデンライナーの食堂車。亀裂の入つた天井から青空が見えている。奇跡的にこの車両は車輪を下にした正規の位置で停止していた。

良太郎は床の上でつぶれた蛙のようになっていた。

顔を起こす。

赤い瞳と逆立つた髪型に赤いメッシュ。

「て、ててて……いったい何が起こつたんだ」

瞬時に青い瞳に眼鏡をかけた青いメッシュの青年に変化した。

「別の世界とやらに來たのかな」

「そや、ナオミは？コハナはどうした？」

関西弁のイントネーション。和風の衣装に金色の瞳。金色のメッシュが入った長髪を後ろで束ねている。

「ナオミ！」

駆け寄つたときには、顔の左半分を覆う紫色のメッシュが入ったウェーブのかかった髪と紫色の瞳、帽子にヘッドホン。

「あ、ああああ、どうしようっ」

うろたえる彼の頭の中に声。

——リユウタ、交代して。

主人格をウラタロスⅡU良太郎にチェンジした。

異変の瞬間、良太郎が危ないと判断したイマジン達はとっさに彼に憑いたのだった。

「大丈夫、大きな怪我はしていないよ。打ち身ぐらいだね

——オーナーは？コハナはどうなってる？

キンタロスの思考を呼んでいたかのようなタイミングで座席の影から声がした。

「私なら大丈夫ですよ」

なぜか傷ひとつなく飄々とした態度もそのままに。しかし、その顔が心配そうにゆがんだ。

「ですがハナさんが」

「ハナちゃん！」

コハナは床の上で仰向けに倒れていた。頭から血を流している。流れ出た血が床を赤く染めていた。

「とにかく救急箱！」

とはいえ車内はむちゃくちゃな状態だ。この車両には救急箱はないので隣の車両に移動しようとドアの前に立ったりだが、電気が消えている状態だ。ドアも開かない。

手で開けようとしたけれど、歪んでしまっているらしく、ちょっとやそつとじゃ開きそうにない。

「こりゃ開きそうにないな」

——代われ、ウラ！

K良太郎になると、腰にデンオウベルトを巻いた。パスを取り出してバックルにセタッチする。

Ⅱ「AXEF OAM」Ⅱ
アックスフォーム

電王Ⅱキンタロスは相撲のしこのようなポーズを取るとやおら扉に向け体当たりした。

横にスライドさせるタイプのはずのドアが歪んだ。

もう一発。派手な音がしてドアごと向こう側の空間に倒れこんだ。

のはまだよいとして、電王はそのまま地面に墜落してしまった。
後ろの車両がないのである。

連結部から外れて五メートルほど後ろに横倒しになっていた。

ウラタロスの思考。

——ひどいとは思っていたけれどここまでとはね。

呆れたというべきか諦めか。

——おいっ、ちょっとまって！なんだありゃあ！

「む、なんや？」

電王Ⅱイマジン達の人でない視覚は上空でぶつかりあう人影を捕らえていた。

片方はコハナと同じぐらいか、十歳ぐらいの少女。黒髪をツインテールに纏めている。白とピンクの見たこともない衣装を身に纏って空中に浮かんでいた。手に一メートル半ぐらいの金色のロッドを持って構えていた。

もう片方は二十歳代の女性。ライトブルーのショートカット。白を基調にした衣装には青いラインが走っている。手には柄の長い斧を構えていた。

何度目かのぶつかり合いの後、少女の得物が女性の戦斧を弾き飛ばした。女性の手から戦斧は離れて空に舞っていく。しかし、少女の得物が攻撃位置に戻る前に女性は少女の懐に入り込んでいた。

振り下ろされようとする腕を取って少女を地面に叩きつける。

同時に女性の手から離れ空を舞っていた戦斧が手の中に戻った。

——やばいっ、代われっ、クマ！

とめる暇があればこそ、主導権を強引に乗っ取ったモモタロスはパスを取り出した。

Ⅱ「WORDFOAM」Ⅱ

瞬時にデンガッシャーを組み立て再びパスをあてる。

Ⅱ「FULLCHARGE」Ⅱ

「くらえっ、俺の必殺技、パート2！」

事情も何もわからないのに、とはウラタロスの感覚だろう。目の

前で小さな女の子が襲われているのだ。見過ごしておけるモモタロスではなかった。

逆落として少女へ襲い掛かる女性にソードモードの分離された刀身がめがけて飛ぶ。

避けられるタイミングではない。

当たった。

イマジン達全員がそう思ったのだが。

空中停止した女性は右手の人差し指と中指でデングァッシャーの刀身を挟み込んで止めていた。

たとえ戦斧で弾いたとしても反転した二撃目が襲う。しかし、一瞬見ただけで武器の特性を見抜いてもっとも正しい判断をするとは、さすが一級神。

「な……んだと」

驚いたのも無理はない。

今まで数多くのイマジン達を倒してきた、「俺の必殺技」である。それがいともたやすく止められてしまうとは。

「この……」

電王Ⅱモモタロスは刀身を動かそうと両腕に力を込めるがぴくりともしない。

女性が口を開いた。

「面白い。実に興味深い武器だな」

「だ——っ、なんなんだよっ、お前は！放せっ、放しやがれ！」

デングァッシャーに渾身の力を込めているようだが、女性は涼しい顔で微動だにしなかった。

女性の指先で刀身は輝きを失って地面に落ちた。

「リンド、この方達は？」

地面に倒れていた筈の少女が空中に浮き上がってきた。かなり強烈に叩きつけられた筈なのだがけろりとしていた。

「どうやら異世界からの客人らしい」

——この方達？ 僕達は見た目は一人なのに。

——どうやら普通の人間ではないようやな。

ウラタロスとキンタロスの思考にモモタロスはイライラを更に大きくしたようだ。

「普通の人間が空飛んで俺の必殺技を受け止めるか！お前らなんだ！イマジンの臭いはしないが」

ごもつとも。

白い女性は電王Ⅱモモタロスの前まで空をすべった。

胸に手をあてて優雅に頭を下げる。持っていた得物はいつの間にかどこかに消えていた。

「一級神特務限定リンドだ。よろしく、異世界の方々」

同じようにリンドの傍らで少女が頭を下げた。

「二級神一種限定アイリンです。地上界での名前を森里愛鈴と申します」

——か、神！神様、だって？

——あ。起きたんか、良太郎。

——とにかくみんな離れて。これじゃ話が出来ない。

良太郎から分離したイマジン達を見ても二人の女神は少しも動じていなかった。

確かに普通の人達ではないらしいと、良太郎共にイマジン達は納得している。

一通り自己紹介を済ませた後。

リュウタロスが。

「ね、だったらさ、ハナちゃんの怪我を治してもらおうよ」

「怪我人がいるのですね」

これだけの事故こじになっているのだ。一人や二人ならずもいて当然なのだがリンドも愛鈴も何もしようとしない。

二人は食堂車の中に案内された。

愛鈴は床の上のコハナを前にリンドへ申し出た。

「ここは私に任せてください」

「わかった任せよう」

リンドは一步後ろに下がった。

愛鈴はコハナの前に進み出ると手を胸の前で組んだ。

「天使、ピュア・ユール純粹なる輪」

背中から金髪碧眼ショートカットの天使が現れて大きく翼を広げた。翼の後ろに大きな光の輪が広がった。

「うわぁ、綺麗！」

リュウタロスは感嘆の声を上げて軽くステップを踏んだ。

天使は愛鈴の背中から離れることはなかったが、背後の光の輪が彼女の足元に移った。輪の中心に愛鈴が立っている。

輪の上で優雅な舞をみせる。

——Waltz of light and wind——（

光と風のワルツ）

手が足が空間を薙ぐ度に光の粒子が振りまかれる。光の粒子はコハナの身体の中に浸透していった。

一分もしないうちにコハナは目を開けた。

「ここは……私は？」

薄暗い食堂車で、光を纏い背中に天使を背負う愛鈴を見て、眼を丸くしている。

「天使……？ 女神様？ ……そっか、私、死んだの……思えば長いよ
うで短い人生だったな」

「こらこらこら、コハナ、お前はまだ死んどらん」

「あ——キンタロスがいる。そっか、イマジンも死んだら天国に……」

コハナの誤解、というか勘違いを解くまでに数分掛かった。

モモタロスはまだ不機嫌そうだ。

「ところでさっきのありゃあなんなんだ」

「お稽古ですよ」

「お稽古お？」

愛鈴の答えに素っ頓狂な声を上げた。

きざっぽく胸の前で腕を組んだウラタロス。

「女神様が戦闘訓練なんてこの世界は相当ヤバイんだね」

リンドは少し苦笑して顔の前で手を振った。

「いやいや、いたって平和だぞ。すくなくとも今のところはな」

もちろんのこと二人はデンライナーの事故を見ているし、知っていたが、戦闘に不測の事態はつき物である。余計なことに気を取られていては次の瞬間地面に倒れているのは自分だ。そんな意味での通常空間の訓練だった。

「だったらなんで……」

「この人達にもいろいろと事情があるのでしよう……それにしても困りました。デンライナーがこの状態では、私達は元の時間に戻ることが出来ません」

リュウタロスは、まるで何か楽しいことを見つけたかのように、踊りながら。

「ねえねえ、だったら、この人達にデンライナーを直してもらおうよ」

顔を見合わせる良太郎達だった。

愛鈴は人差し指でほっぺたを引っかいていた。

困っているような照れているような表情だ。

「——私達の力……法術は異世界の機械には効きづらいんです」
マシンナーズと同じように。

「なんだあ……」

落胆の色を隠さないリュウタロスだった。

「いや、待て、もしかしたら直せるかもしれない」

「リンド、それって」

リンドは愛鈴の言葉を片手で制した。

「まるきりあてにされても困るが、可能性としてはないわけではない」
「い」

「なんか奥歯に物が挟まったような言い方だけれど、問題でもあるの？」

「問題というか……ねえ」

「ともかく、スクルド姉様に連絡を取りますね」

愛鈴は空中から携帯電話を取り出した。

別に原子を再構成して作り出したりしているのではなく、自分の部屋においてあったものを、転送術で取り寄せているんだけれど。

「スクルド姉様？君、お姉さんいるの？」

性格丸出しのウラタロス問いかけではある。

「スクルド」の名前を聞いたオーナーの顔色がなぜか変わった。

「正確には私の叔母です」

短縮番号を押して。

「——あ、スクルド姉様？少しご相談したいことがあるのですが、お時間下さいませんか？……バイト……はい。——はい。では六時に家で」

折りたたんだ携帯は空中に解けるように消えた。

「ベルダンディーに連絡しなくてよいのか？」

オーナーの顔色が「ベルダンディー」の名を聞いて更に変わった。リンドの指摘だが。

「お母様、携帯持たない主義なもの」

少し肩を竦めると、愛鈴は握っていた拳を開いた。

拳の中から「^{メッセンジャー}光の蝶」が舞い上がった。

良太郎は神経質に眼を瞬いている。

「あれは……なに？」

「光の蝶」は食堂車の壊れた天井から車外へ出て行った。

「伝書鳩みたいなものです……では、家に行きましょうか」

「家？でも、こんなに大勢で押しかけていいの？」

イマジン達を入れると良太郎、コハナ、ナオミ、オーナーで七人である。良太郎のもっともな心配だ。

「問題ありません。賑やかなのはみんな好きですから。ここからだとし歩くことになりましたが、それもまたよいものですよ」

というか、他力本願寺は年中賑やかなだけだ。

デンライナーの墜落地点から他力本願寺までは三キロぐらいあつ

た。

森の中を歩きながら不満を言うのはリュウタロスだ。

「ねえ、歩くの飽きた」

「まだいくら歩いとらんやないか」

「だって疲れたあ。ねえ、愛鈴ちゃんの力で運んでよお」

甘えた声だ。

疲れたのではなく楽をしたいだけなんだろうけれど。

「何でも人に頼るのはどうかと思いますよ」

十歳の子供に言われてしまう。

「何から何まで神様^{わたしたち}が手を出していたら人間は進歩することをやめてしまうだろう？」

リンドの言葉にキンタロスが大きく頷いた。

「そやな」

先をたって歩く愛鈴が振り返った。

「それに。私、歩くの好きですもの……私は人間と女神のハーフなんです。異種族間の生殖は受精も着床も難しくて——つまりは、子供が生まれるのは奇跡に近い確立なんです。今の私の存在が奇跡のようなもの——それが、大地を踏みしめて歩く、あたり前のことをしているって、ちょっと素敵じゃありませんか？」

「うん……そうだね。その通りだよ」

すっかり感化されてしまった良太郎の横でモモタロスはそっぽを向いた。

「ふん、俺にはそういうのわからねえなあ」

ナオミは、先ほどから様子がおかしいオーナーを気遣って、顔を覗きこんでいる。

彼女とキンタロスの背中には食材の入ったリュックが背負われている。デンライナーの食堂車から無事だったものだけを持ち出したものだ。

「どうしたんですか？ 顔色悪いですよ？」

「……あ、いえ、何でもありません。大丈夫ですから、お気になさ

らずに」

ステッキを片手に平静を装って見せるけれど額に脂汗が浮かんでいた。拭うことも忘れているようだ。

疑わしそうにナオミの目が細くなった。

「オーナーがそんな顔する時って絶対何かあるんですよねえ、何隠しているんですか？」

むしろ楽しそうである。好奇心旺盛って感じで瞳が光っていた。ウラタロスがお気楽な軽い感じで。

「まあまあナオミちゃん、オーナーがそう言うんだから心配ないよ」「でも……」

手招きされてウラタロスの傍に行くと耳打ちされた。

「あの様子じゃ無理に聞き出さなくてもすぐにぼろを出すよ」

他力本願寺には南を正面として大きな山門と東西に小さな……正面のと比べるとだが……山門があるけれど、北側は申し訳程度の木の垣根と木製の扉があるだけだった。

「君の家はお寺なんだ」

大きな敷地の東側に本堂、西側に母屋。今風のお寺のように普通の住宅だかよくわからない作りではなく、瓦屋根の純和風の平屋の建物だ。

庭木の剪定をしていたシーグルが見止めて挨拶をする。

「お帰りなさい、愛鈴様、リンド様……てええええっ！」

良太郎、ナオミ、オーナー、コハナはともかく、赤青金紫のイマジン達を見てさすがに引いていた。

さっきから不機嫌極まりないモモタロスが、仰け反るシーグルにかがみこんで睨みを利かせた。

「あーん、なんだあ、文句あるのかっ？」

ウラタロスが「先輩、こんな小さな子に」と咎めているが。

シーグルは拳を握ったままモモタロスに突き出した。

「ろ、ロ、ロ、ロケットパンチ！」

「ぐぎゃあ！」

避ける暇などあるわけがない。ぶっ飛んできた腕を鼻柱にまともに浴びてひっくり返った。

「だめよ、お客様に失礼なことしちゃ」

愛鈴はシーグルの後頭部に手をあてて強引に頭を下げさせた。

「——ごめんなさい、この子アンドロイドなんです」

「いやあ、今のはモモタロスが悪いよ。しかしよく出来てるね。人間にしか見えない」

良太郎の賛辞が終わらないうちにシーグルの悲鳴が響いた。

「あーっ、腕が壊れちゃったじゃない！なんて硬い顔してるのよ！」
肘から手首のちょうど中間で分離してぶっ飛んだ腕は、細いワイヤーで本体と繋がっていた。

ワイヤーを巻き取って打ち出した腕を確かめた時、拳に亀裂が入っているのに気がついたようだ。

さもありなん、とばかりにウラタロスである。

「先輩の面の皮の厚さは折り紙付だからね」

「っだと、この亀野郎！」

「まあまあ、ここはモモの字、俺に免じて……」

揉めだすモモタロスとウラタロスの間にキンタロスが割ってはいるといふいつもの光景が繰り返された。

下手に中に入ると余分な怪我をしかねないのは学習済みだ。

良太郎はイマジン達を黙殺した。

「それでデンライナーを直してくれる人って何処にいるのかな」

なんとも頼りなげな口調と物腰だがこれが良太郎なわけ。

「スクルド姉様はいまアルバイトに出掛けてます。六時過ぎには戻りますので、中であつろいで下さい」

身をかめてこそそこそこの場から遠ざかろうとしているオーナ―を、ナオミが呼び止めた。

「どちらにいかれるんですか？」

「い、いえ、急用を思い立ちましてね」

いつも飄々としているくせに明らかに態度がおかしい。

「デンライナーの修理よりも大切な用事ってあるんですか？」

「どうにもさっきから様子がおかしいよね。なんかここに来たくない理由わけでもあるの」

ウラタロスの鋭い斬り込み、って言うよりも、モモタロスの相手
がうざったくなくて矛先を彼に向けたようだ。

今まで一言も発しなかったリンドがまるで何かに気がついたように
声を上げた。

「あ、ウルド」

びくん

と、オーナーの背筋が伸びた。

リュウタロスはくるくるとステップを踏みながらリンドに擦り寄
った。

「なにになに？どうしたの？」

興味津々と言った様子。

リンドの視線を追った先に褐色の肌と銀髪の人影を見て飛び上が
って喜んだ。

東の空からこちらに向けて飛んでくるのは、三姉妹の長女、過去
を司る女神ウルドだ。右手に紙袋を抱えている。

「わーい、あの人も空飛んでる」

「ウルド姉様っ！」

上空のウルドに手を振る。姉と呼んでいるが正確には彼女も愛鈴
の叔母だ。

「愛鈴、ただいま。お土産買ってきたわよ、あなたの好きなクッキ
ー……て」

ウルドもまた良太郎一行を見て空中で固まってしまった。
ただしその視線はイマジン達ではなく一人の男に注がれている。

「な……なんで、あんたがここにいるの」

地面に着地したウルドに向けてデンライナーのオーナーは地に片
膝をついて頭をたれた。

「お久しぶりでございます。ウルド様」

N
E
X
T
—
外
伝

時
の
列
車

中
編

時の列車 中編

これにはその場にいた全員が驚いていた。
いや、リンドだけは平然としている。

ウルドの懺然とした表情。まるで苦いものでも噛み潰したかのようだ。

「どういうことか説明してもらえるかしら」

「はあ……それがその……」

いつもの泰然自若、飄々とした態度は何処に行ったのか、オーナーは借りてきた猫、蛇に睨まれた蛙のようだ。顔にものすごい汗。

「あの……って、知り合いなんですか？ 姉様」

「ふっるーい、知り合い、と言うか……」

こめかみに手をあてている。

事情がよくわからないのは良太郎サイドも同じだ。

「オーナー？ 誰なんですか？」

興味津々と言ったナオミを先頭にウラタロスが続く。

「もしかして昔の彼女とか」

「いやあ、あんな綺麗な人がそれはないでしょ」

「ないない」

いささかに失礼な良太郎とモモタロスである。

「いやいや男と女の間やからな。わからんでえ」

「ええっ、そうなのお、ねえねえ！」

すでに玩具にされている。

オーナーは大汗を掻きながら口の中で呟いていた。

「そんなものであればどれだけよかったか」

「ちよっと」

ウルドは手の平を上にしてオーナーを手招きしていた。

「話があるのいいかしら」

「ふあいつ！」裏返った声で直立不動。

「愛鈴、あなたはこの人達をお願いね」

お土産の紙袋を手の中に渡すと母屋に向けて歩いていった。

「わ……判りました、ウルド姉様」

愛鈴の顔が珍しく緊張している。ウルドの瞳を見てしまったからだ。

——姉様本気で怒ってる。

リュウタロスはむしろ楽しそうだ。

「ねえ、右手と右足が一緒に出てるよ」

二人がウルドの部屋に消えるのを見届けた。

案の定と言うべきか、セオリーとでも言おうか。

モモタロスが後を追う。

「どんな話をするのか聞いてやろうぜ」

「やめたほうがいいです」

愛鈴が前をふさがぐが邪険に追い払った。

「うるせえなあ、俺は聞きたいんだよ」

縁側から廊下に上がり障子の前で聞き耳を立てようとしたが。

ものすごい悲鳴と共にモモタロスは庭に吹っ飛んで戻ってきた。

赤いイマジンは地面の上で悶絶していた。身体に紫色の小さな稲妻が絡み付いていた。

呆れた眼で愛鈴は見ている。

「だから言ったのに」

「今のは何？」

「結界です。ウルド姉様のは強力ですよ」

「でも、君なら解けるんじゃないの？」

「結界の解除にはパスワードが必要なんです。パスワードは無限大に存在しますから張った人にしか解くことは出来ません。それに聞かれたくないこと、聞かなくていいことを話しているんです。だから私も聞き耳を立てることはしません」

ウラタロスは肩を竦めて見せた。

「とにかく、お客様を庭に立たせておいたなんてお母様に知られた

ら、私、叱られちゃいます。どうぞ中に——ばんぺい君、お客様よ、失礼のないようにね」

大きな丸い球体の上に頭にあたる少し小さな球体が丸い陣笠をかぶって乗っている。細身の手足が二対。何処からどう見てもロボットだ。

P i

電子音と共にばんぺい君は丸いレンズの目を光らせた。

愛鈴の勧めで一同は「みんなのティールーム」と書かれた看板の掛かった八畳間にあがった。

ウラタロスは関心しきりである。

「それにしてもすっかりした子供だね。とてもハナちゃんと同じ歳だとは思えないよ」

「そやなあ、これはぜひご両親に……」

ギロリ、とコハナの目が青と金のイマジンを睨みつけた。

「あのね、言っておきますけどねっ、私はこんなりをしているけど、二十一なんですからねっ！」

「あ、いや、なんかゆうたか？ 亀の字？」

「なんでもないよ、熊ちゃん」

て、ことは、愛鈴は実年齢二十一のコハナよりもっさりしているってことにならないか？

それにしても八畳間に良太郎一行プラス、リンドの七人では家具も入っているのではちょっと狭い。

座卓に筆筒、昔ながらのブラウン管のテレビ、本棚、テーブル。

愛鈴が手にお盆を持って「みんなのティールーム」に戻ってきた。お盆の上にはティーカップが乗っている。後ろに同じくお盆を手に持ったシーグルが控えている。

壊れた腕は予備のものに付け替えたようだ。

「みなさんお茶が入りました」

ナオミが感心したように。

「さっきからいい香りがすると思ってたけど、これは紅茶……アー

ルグレイですね」

やはりわかってくれる人がいるのは嬉しいらしい。

愛鈴は照れくさそうに笑っていた。

「わーい、お茶だ、お茶だ！」

「こおらリュウタ！人数分あるんだからがつつかないのっ！——すみません、駄がなくなっていなくて」

コハナは頭を下げている。

「いいえ、楽しく飲んでいただくのが一番です。あまりうまく淹れることが出来ませんでしたけど」

モモタロスはおもむろに一口がぶりとやった。香りを楽しむなんて優雅な趣味は持ち合わせていない。

「う、うまいっ！」

「こんなにうまい紅茶は俺、初めてや」

「おいしーい」

「ほんとに美味しいよ、味も香りも一級品だね」

イマジン達の賛辞にコハナと良太郎が同意した。

ナオミだけが一人微妙な顔をしていた。

（美味しい、おいしいけど、——なに？なんなの？この物凄い敗北感——）

追い討ちをかけるように。

「いいえ、お母様の淹れてくださるものに比べたら、私のなんてまだです」

これより美味しい紅茶って……

玄関から涼やかな声。

「ただいま」

「お母様」

ふわりと立ち上がって玄関に向かう愛鈴の後姿。

溜息を漏らすウラタロスをモモタロスが睨みつけた。

「なんだあ、どうした？」

「——いや、なんかちょっと安心してさ」

「うん？」

「あんなところは歳相応なんだ」

モモタロスは興味なさそうに鼻を鳴らした。

それよりも彼の目下の関心は白い女神にあるようだ。

ティーカップを片手に香りを楽しんでいる彼女は一枚の絵画のようだ。

さっきは良太郎が眠っていたから。良太郎の協力があるならもつと力が出せるはず。

しかし――。

玄関の親子の会話が聞こえる。

「おかえりなさい」

「ただいま、愛鈴」

「あの、お客様が」

「ええ。判っているわ。ウルドは戻っているのかしら」

「お客様の一人と自分の部屋に籠ってしまわれて」

「――あ、そうね」

しばしの沈黙。

玄関の方の障子を開ければ彼女の姿が見えるはずなのになぜか誰も見ようとしない。

「ほかのお客様は？」

「「ティールーム」ですよ」

「ご苦勞様」

廊下を近づいてくる気配。

玄関の方の障子が開いて女性が一人姿を見せた。

「こんにちは、一級神二種非限定女神ベルダンディーと申します」

廊下に膝を付いて優雅に頭を下げるその美しさよ。

腰まである亜麻色のポニーテール。碧眼は宇宙の深遠を湛えて、

白く健康的な肌と桜色の唇、金色の大きなイヤリング――封緘――

が彼女が何者であるかを示していた。着ている物はパステル調のむしろ地味とも思われる色使いだ。しかし、その存在感はまるで彼女

自身が光を放っているかのようにだった。

「このたびは大変なことにあわれたそうで、たいしたおもてなしも出来ませんが、出来る限りのことをしますので、ゆっくりしていただくさいね」

優しく笑って頭を下げた。

奇妙な間が開いてしまった。

良太郎一行はみなベルダンディーの美しさに飲まれてしまったようだ。

ややあつて、ようやく気を取り直したコハナが、モモタロスの脇腹を肘で突付いた。

「ほら、モモ！」

「お、おとお、おうっ、よろしくな」

うわずったおかしなイントネーションだ。

「では愛鈴。後はあなたとシーグルに任せるわ。私はウルドの部屋に用があるからお願いいね」

「判りました、お母様」

もう一度軽く頭を下げると、ベルダンディーは廊下の向こうに消えた。

見送った娘は。

「あ、やだ、私、クッキー出してない」

いそいそと茶の間に消えた。

まったく抜けてるんだかしっかりしているんだか。

母親に似たらしい。

ベルダンディーが離れてからしばし。

「——き、綺麗な人、やったな」

「おい、亀！いつもの調子はどうしたんだよ」

確かにいつもなら良太郎が拒んでも強引に身体を乗っ取って目の前の女性をナンパしているはずだ。

ウラタロスは何かに憑かれたようなぼうつとした声で。

「初めてだよ。僕が女性見て動けなかったの」

「あそこまで綺麗だと嫉妬とか憧れとか通り越しちゃいますね」
溜息とともに肩を竦めるナオミだった。

ややあって、キンタロスがもつともな疑問を切り出した。

「オーナーとあの二人、何を話してるんやろ」

「いずれにしる僕達じゃ何も出来ないよ」

「そんなのやってみなくちゃわからないじゃねえか」

みんなで力をあわせれば。

電王のクライマックスフォームならもしかしたら。

真っ先にウラタロス。

「僕は一抜けた。無駄な努力はしない主義でね」

すっと、良太郎も手を上げた。

「僕も気が進まないな。誰にだって隠しておきたい秘密の一つや二つあるよ」

「えーっ、やだっ、僕知りたい。ねえねえ、お姉ちゃんなら何とかできるよね」

リュウタロスだけがモモタロスに同調している。

問われたリンドだが。

「その一件に関しては私も良太郎君と同意見だ」

もつとも、一級神のベルダンディーは嘘がつかないので真っ向から訊ねられたら答えてしまうかもしれないが。

リンドにはそんなことを教えてやる義務も責任もない。

それにベルダンディー達だって「神」の名を冠しているのである。どうしても隠しておきたいことには何がしかのセキュリティを施しているはずだ。

リュウタロスは露骨に不貞腐れた。

「ちえっ、詰まんない」

「ねえ、それよりも」

ナオミが何か楽しいことでも見つけたように。

「あれだけの女を射止めた男性って気になりませんか？」

「それは……」

「なるね」

顔を見合わせる一同。

「みなさん、お茶菓子をお持ちしました。紅茶のお代わりはいかがですか？」

お盆の上にクッキーその他を載せている。

はしゃぐリュウタロス。好奇心よりも食欲のようだ。

コハナはこめかみを押さえていた。少なからず頭痛がしてきたらしい。

代わってナオミが質問する。

「愛鈴ちゃん」

「はい、何でしょう」

「あなたのお父さんでどんな人？」

一瞬、愛鈴は何を聞かれたのか判らないって感じできょんとしていた。

それが華の様な笑顔になった。

「とっても素敵なお人です」

「今日は？お仕事に行ってるのかな」

「仕事はお休みです、でも今日は少し御用があつて出掛けています。夜の七時頃には戻ると思いますよ」

そんなには待てないと、モモタロス。

「写真でもねえのか」

「慌てなくても時間になれば戻ってきます。時には待つことを楽しむ余裕も必要ですよ」

良太郎は神経質に眼を瞬いていた。

「あの……」

「はい？」

「君ってほんとに十歳？」

「もちろんです」

にっこりと天使の微笑み。

六時少し前にスクルドから電話があつた。

戻るのは少し遅くなりそうだとのこと。

そして、七時少し前。

バイクの排気音。

答えるようにぱたぱたと廊下を歩く音。

心なしか浮かれているように聞こえるのは気のせいだろうか。

玄関を開ける音と。

「お帰りなさい」

の涼やかな声。

まるであたり前のように二人は寄り添った。

「ただいま」

「お客様が見えてますよ」

「天上界から？」

「いいえ、異世界からです」

「あ、そう」

八畳間の障子を開けて廊下に身を乗り出していた良太郎達と目があつた。

「こんばんは。森里螢一です」

「こ……こんばんは」

一通り自己紹介が済んで。

螢一は腕を組んで少し首を傾げている。

「それにしてもリンドを入れて八人か大所帯になったね」

「それも楽しいじゃありませんか」

「——だね」

お食事はすぐ出来ますから手を洗ってきてくださいね。

お風呂は沸いてる？

もうすぐ沸きますよ。

リュウタロスは螢一を見てちよつとがっかりしたようだ。

「なんか……わりと普通の人だね」

「しかしあの男、俺達を見ても少しも驚いてないぜ」

モモタロスに続いてウラタロス。

「うーん……肝が据わっているのか」

「でも、すごく優しそうですね」

心なしかナオミの頬が桜色に染まっている。

「男は顔やないで」

「あら、男は顔も大事ですよ」

口々に勝手なことを言っている。

今更イマジンの一人や二人で螢一も驚きはしない。

さて時間は少し遡る。

ベルダンディーが買い物から戻ってきて少し過ぎた頃。

母屋の北西の隅にトイレがある。

トイレと螢一の部屋の間、四畳半。「ウルド様の城」と書かれた看板が障子に掛かっていた。

障子の向こうの室内ではデンライナーのオーナーがかしこまって座っていた。

彼の前の空中に浮かぶウルド。

「まったく、今回はドシ踏んだわね」

「まことに、その——」

オーナーは恐縮萎縮、空気の抜けた風船のようだ。

ベルダンディーがフォローする。

「まあ、一生懸命やろうとした結果ですし」

「それは認めるわ。でも、壊れちゃったあれ、どうするつもりなの？」

部屋の壁際に座卓があって大きなパソコンのモニターとキーボードがある。モニターには大破したデンライナーが森の中に沈んでいる映像。

「申し訳——」

ウルドは露骨に不機嫌な顔だ。

「大体、どうしてもって言うから、二級神のあんたに任せたのに——そりゃ、電王に関してはよくやったと思ってるわよ、多少の偶然

もあつたけどね」

頑張ったのは良太郎や侑斗やイマジン達でオーナーはほとんど何もしていないけれど。

て、いまなにかとんでもないことを言わなかったか？ウルドよ。

「だけどいくらなんでも今回のはないんじゃない？」

きちんと駅に停まっていたならこんなことにはならなかったわよね。

ベルダンデューは苦笑しながらだ。

「半分は私達のせいですよ」

「そこを突っ込まれると弱いけどさ」

今度はウルドが苦笑している。

あの場合は仕方なかったわよね。

「ともかく——あれを何とかしないといけないわね。一番手っ取り早いのはキングライナーをここに呼ぶ事だけど」

「列車の修理も出来ますからね。でもあれはスクルドの担当ですよ」

「バイトから戻ってくるのを待つしかないか」

正確にはあれではなく「あれらは」ではあるが。

『お手紙が届いていますよ』

座卓の上のパソコンにメッセージ。

天上界のペイオースからだ。

メールを開いて本文を読んだウルドの柳眉が歪んだ。

「これは……ちよつとやばいことになってるらしいわね」

結局、スクルドが他力本願寺に戻ってきたのは七時半を少し回っていた。

「いやあ……参ったわ、交代の子が遅刻してさ。まったく最近のは責任感がないったら」

ファミレスのバイトのことらしい。

「話は愛鈴から」メッセージ「光の蝶」もらったから判ってるわ。壊れたのはデンライナーの「ゴウカ」なのね？「イスルギ」や「レッコウ」

や「イカズチ」は連結していなかったのね」

「はい、戦闘中ではなかったの」

デンライナーのオーナーが深々と頭を下げる。

螢一とベルダンディーの間の子供が十歳になるのである。スクルド本人も当然変っている。年恰好は大学生ぐらいで手も足も伸びて胸もお尻も立派に育っていた。

彼氏、仙太郎との仲も良好のようだ。

モモタロスがオーナーの肩を掴んでスクルドを指差した。

「をいつ、ほんとにこんなのがデンライナーを直せるのかよっ！小さくなる前のハナクソ女と同じぐらいの歳じゃねえか！」

良太郎とウラタロスが押さえに掛かった。

先輩、まずいよっ。

モモタロスだめだよ。

スクルドは冷めた眼で彼らを見ている。昔の彼女なら、スクルドボムのひとつでも取り出しているんだろうけれど、さすがに今は違うらしい。むしろ遠慮会釈なくモモタロスを上から下まで眺めると一言。

「デザインのセンス、最低ね」

クリティカルヒット！

何も言い返せない良太郎達だった。

デンライナーの墜落地点。

二人の姉は同行しているが、デンライナーのオーナーは他力本願寺に残った。

「——こりゃ派手に壊れたわね」

呆れ顔だ。

横倒しになって亀裂の入った車体。衝撃で連結の外れてしまっている車体まであった。

もともと先頭車両の「ゴウカ」や武装を積んだ車両はともかくとして、普通の客車や食堂車などはあまり強固に作られていない。

先頭車両「ゴウカ」の車体に右の手の平をあてた。

「自己修復機能のフェイズ3まで破損、つまりは自己修復不可能。やっぱりキングライナーを呼ぶしかないわね」

スクルドは着ているものを赤とピンクの女神服Ⅱ天衣に変化させた。

墜落地点を下に見て上空二十メートルぐらい。空中に浮いている。手を胸の前で組んで身体をそらし天を仰ぐ。

額の「未来」の紋章が光りだした。

紋章から一条の光芒が天に向かって伸びていった。

光が途切れて数秒。

天の一角が虹色の歪みを見せた。恐ろしい勢いで大きくなった中心から巨大な物体が姿を見せた。

独特のミュージックホーン。

ライナーモードのキングライナーである。

スクルドと同じぐらいの高さの空中に停止した。

さすがにでかい。大きさに圧倒される。

「こっからが大変なのよね」

デンライナーそのものは動けないので、キングライナーのオプションを使って脱線して動けない車両を収容した。

確かにこれがなかなか大変で収容作業を終えるまでに約一時間半を要した。後は機械が自動で破損箇所を判断して修理してくれる。

時間の中に消えていくキングライナーを見送った。

「お疲れ様」

「ありがとうお姉様」

ウルドは眼下の森を見ていた。残念そうな表情だ。

「綺麗な森だったのに荒れちゃったわね」

普段はあまり女神らしいところを見せないのだがこんな時は別らしい。

一キロ以上もなぎ倒された樹木とむき出しになった大地が続いていた。

ベルダンディーは自分の胸元に手をあてた。

「夜が明けたら私が癒しをかけておきますね」

「あたしも手伝っていいかな」

「もちろんよ」

スクルドの言葉にベルダンディーの頬が緩んだ。

ウルドも珍しく乗り気のようなのである。

「それじゃあ久しぶりに三人でやりますか」

ベルダンディー達がキングライナーを呼び出していた頃。

他力本願寺の母屋。

「みんなのティールーム」

八畳間に赤青金紫のイマジン達とコハナ、良太郎、ナオミ。全員が正座している。

上座、床の間を背にオーナーがこれも正座だ。

「さて、みなさん。この世界の女神様のご好意によりデンライナーを修理していただくことになりました」

安堵の表情を浮かべる一同。

彼らにとってデンライナーとは家であり心落ち着ける場所のようだ。

「ですが修理にあたって少しばかり条件があるそうです」

条件と聞いて良太郎は不安そうな顔をしている。

どんな事を出されたのだろう。

ナオミもコハナも心配になったらしい。

「条件？」

「どんな条件ですか、オーナー」

「何も聞かない事です」

はい？

顔を見合わせる一同。

「何も聞かない事？」

オーナーは鷹揚に頷いていた。

「デンライナーの修理のこと、女神様達とデンライナーや時の列車とその設備の関係、もちろん私と彼女達の関係のことをです」

しばしの沈黙、動揺と言うべきか。

モモタロスはそのあたりはどうでもいいらしい。

「俺あ別にいいぜ。デンライナーが直るならよ」

ある意味こいつが一番扱いやすいかも。

しかしながらその他の者は釈然としない様子だ。

良太郎が。

「「なぜ聞いてはいけないのか」との質問も含めてですか」

「もちろんです」

オーナーの即答だ。

顎に手をあててキザなポーズのウラタロス。

「デンライナーが直るのは嬉しいけれど……どうにもなんか気持ち悪いね——そもそもそんな条件を本当に出されたの？」

「お疑いならば確認を取られてはいかがでしょうか」

そこまで言われては返す言葉がない。

リュウタロスははじめは首をかしげていたがやがてめんどくさくなったらしい。

「僕もいいや、どっち道聞いても教えてくれないんでしょう？」

「それはまあそうですが」

「だったら聞かない、それでいいんじゃないかな」

モモタロスが鼻を鳴らした。

「まあ、そういうこった。クマ、お前はどうかんだ」

返事の変わりに低い地鳴りのような音。キンタロスの鼾だ。

立ち上がったコハナに脇腹を蹴られて覚醒した。

「俺も今ひとつ気の乗らんとところもあるれど、まあ、仕方ないやろ」
「しっかり受け答えしてる。こいつは起きてたのか寝てたのか？」
ナオミが手を上げた。

「修理にはどのぐらい掛かるんですか？」

「この世界の時間で二日と言ったところですか」

デンライナーの状態を考えればかなり早いと言えるだろう。

「その間はこの家に？」

「そうなりますね」

「迷惑じゃないでしょうか」

「確かに。ですがここはご好意に甘えるしかありません。寝るときにはハナさんとナオミさんは隣の茶の間を使ってください。許可は取っております」

オーナーはひとつ咳払いすると。

「ともかく私達はこの世界ではイレギュラー、異邦人であることを忘れないように、節度を持った行動を心がけてください」

コハナがイマジン達にガン飛ばす。

「大人しくしてろってことよ」

「どう暴れろって？戦うイマジンもないのに？」

「確かに」

ウラタロスは肩を竦めた。

腕を組んで悠然と頷くキンタロス。

しかし、中には思わない者もいたわけで。

「にしてもこの部屋に六人は狭いよな」

「寝相の悪い奴がおるからなあ」

寝るときに六人ってことだろう。

「大丈夫です——シーグルさん」

「はい」

障子を開けてシーグルが部屋の中に入ってきた。手に奇妙な機械を持っている。

機械を畳の上に置いた。

「何ですか？」

「空間ダブラーという機械だそうです」

シーグルはコントローラーを手にしてすでに操作を始めていた。

「二倍ぐらいいいですか？」

「ですね、十六畳もあれば充分でしょう」

オーナーとシーグルの会話の意味を判らず一同は何が起こるのか興味津々。

「設定終了起動します」

声とともに部屋が広がった。縦横だけでなく天井までの高さも高くなっている。

こんな時に真っ先にはしゃぐのはリュウタロスだ。

「わーい、なにになに？ どうやったの？」

「なんだこりゃあ？ 部屋が大きくなった」

「どんな手品なんや？ それとも女神様の力かいな」

オーナーはにんまりと笑っている。

「手品ではありません、女神の力でもありません。この「空間ダブラー」の力です」

空間は一時間後にも二時間後にも同じく存在している。この空間を時間的にずらして現在の空間に重ねて使用することで、擬似的に空間を広くするマシンらしい。

モモタロスは目を白黒……というかこいつには白目はなかったな。

「今のはなんだ？ 英語か？」

「先輩、脳味噌ショートするから考えないほうがいいよ——ともかくすごい技術であることには間違いないね」

「あ、でも。モモ達がこの部屋を占領することには違いないのよね」
いつもここで寝ている人達はどうするのだろう。

「大丈夫です、なにかあてがあるようですよ」

「あて……ですか」

リュウタロスが「空間ダブラー」のコントローラーをいじっている。

コハナは本能的に危険を感じたらしい。

「ねえ！ これどうやるの？」

「リュウタ、勝手にいじらないの」

「だって面白そうなんだもん」

モモタロスがコントローラーを取り上げた。

「そうそう！ おいっ、これどうやるんだ？」

「あー、僕がやるの！」

……。

コハナは頭が痛くなってきたらしい。
つくづくこいつらはっ。

直情馬鹿と嘔吐きのナンパ師と人情力馬鹿と悪餓鬼。こんな連中を年中相手にしてたらストレスは溜まる。

「充分広いわよこれ以上は必要ないでしょ」

コハナはストレス解消の手段を行使した。

「……っ、」

「酷いよハナちゃん」

股間を押さえてうずくまるモモタロスと顎を押さえているリュウタロスだった。

シーグルがちょっと呆れた顔をしている。

「それはあたしが操作しないと起動しないようになっているんだけど」

「え、そうなの？」

「うん。以前にちょっとした騒ぎがあって、スクルド様がこれを改良したの。法術も掛かっているからギガトン級の核ミサイルでもぶつけないと壊れないわよ」

早く教えてやれよ、シーグル。

ウラタロスは機械そのものよりも別のことに興味を持ったようだ。

シーグルを覗き込んだ。

「ちょっとした騒ぎってどんなことがあったの？」

しばし黙り込む。

「――プロテクトは掛かっていないわね。話してしまったのいいの……かな」

「ん？プロテクト？」

「機密扱いのメモリーにはプロテクトが掛けてあるの。これは私を造ったスクルド様でないと解除できないわ」

なんて言ったの？

赤金紫のイマジン達はコハナから説明を受けてようやく納得した

らしい。

「プロテクトが掛かってないって事は話しても問題ないことなんだよ。聞かせて欲しいな」

「では——この話をする前に「女神の免許制度」について理解してもらわないといけないわ——」

少女型のアンドロイドは静かに語り始めた。

人間と女神の物語を。

おそらく普通であるなら話している者の正気を疑うような内容だ。良太郎達は話が終わるまで誰一人として口を挟むことはなかった。ナオミの溜息。

「素敵な話ですよね」

手を胸元で組んで瞳に星がキラキラと、夢見る乙女モード全開だ。胡坐を掻いて聞いていたモモタロスはシーグルに背中を向けてごろりと横になった。

「ふん——悪い話じゃないよな」

「あらら、ありゃ相当感動してるな」

ちよっとおどけた声で評するウラタロスだ。もちろん彼だって充分感動しているようだ。

キンタロスは顎に手をあてて首を鳴らす。

「うむ、ええ話や。泣けるで」

「もっと、もっとほかにはないの？」

リュウタロスはまだ食い足りないって感じた。

シーグルは顎の先に指先をあてて少し首をかしげていた。

「そうね……話するのはいいけど、代わりにあんた達の話も聞かせて欲しいな」

「いいよ」

良太郎は快く引き受けた。

「でも少し長い話になるけどいいかな」

「問題ないわ」

他力本願寺の夜は更けていく。

玄関で挨拶の声がした。

三姉妹が戻ってきたらしい。

出て行こうとするイマジンと良太郎達をオーナーは手で制した。

「あなた達はシーグルさんの話でも聞いていてください。デンライナーの様子はこの私が」

「はいはい、そういう約束だったからね」

とはいえ障子一枚である。

イマジンの聴力なら充分聞こえる。

それでデンライナーの様子は。

ばっちりよ、予定通り二日後には元通りになっているわ。

は、ありがとうございます。

任せなさい、この天才スクルド様に掛ければ電車の一つや二つ。

モモタロスは話を聞いて口の中で呟いた。

（どうやら、デンライナーは心配なさそうだな。だとすると残る問題（は）

良太郎達人間はシーグルの話に聞き入っていて聞こえていない。

話は「天使喰い」がリンドに取り付いていたことが判明したところである。シーグルの話し方もあってかほかに気を配っている余裕な
んかない。

奥から螢一と愛鈴が出てきたようだ。

「お母様っ」「お帰り、ベルダンディー」

「あら、私達に挨拶はないの？」

「お帰り、ウルド、スクルド」

「お帰りなさいませ、ウルド姉様、スクルド姉様」

アットホームでとてもいい雰囲気だ。

「では、螢一さん、本堂に行きましようか」

「そうだね。愛鈴も一緒に寝るかい？」

「ええ、あそこで三人一緒に寝るのは久しぶりですね。嬉しいです」

「いつまでも甘えんぼさんね」

三人の声が遠ざかっていく。

ウルドもスクルドも自分の部屋に向かった。
もちろん眼で見ているのではなくて耳で聞いて気配を感じている
のだけだ。

シーグルの話も一区切り付いて、就寝。

良太郎はモモタロスから話を聞いて驚いている。

「えっ、本堂に！」

「ああ、なんか隣のでかい建物に行ったみたいだぜ。心配すること
なかったな、あんなでかい寝るところがあつてよ」

「じよ、冗談じゃないよ」

古いお寺の本堂なんて、だだっ広くて木の床と本尊である仏像が
あるだけで、何にもないはずである。

親子三人が毛布一枚にくるまっているところを想像して、すまな
い気持ちで一杯になっているようだ。

自分達は用意された暖かい布団に寝ているのに。

「いいんじゃないか。好きで寝てるんならさ」

「そういう問題じゃなくてさ」

考え込んでいるが。

しばらくして立ち上がった。

「僕、あの人達に挨拶してくるよ」

「よせよ、もうこんな時間だぜ。もうきつと寝てるって」

眠ってるのを起こすのは帰って失礼だと。

「いや、やっぱり行ってくる」

こんなところは変に頑固だ。

「しょうがねえな、俺も一緒に行つてやるよ」

モモタロスには他意があるようである。

玄関を出て本堂の正面に周り、階段を上がって、大きな木の扉の
前に立つ。

「すみません。あの——すみません、もうお休みでしょうか」

いかにも良太郎らしい申し訳なさそうな声だ。

後ろにはモモタロスが控えている。暗い中で見る彼のシルエット

はちよつと迫力があつた。

返事がない。

「もう寝てるんだよ、きつと、明日にしようぜ」
「うん——だけどさ」

良太郎は大きな木の扉を押し開けた。

そこには——

N E X T——外伝 時の列車 後編

時の列車 後編

「なんだ、誰もいねえじゃねえか」

暗い本堂の中はがらんとして人影はなかった。磨きこまれた木の床と神聖な雰囲気。かなり広い。正確には広いと感じられるだけで実際は薄闇の中にぼんやりとあたりの様子が見えるだけだ。

ご本尊が慈愛に満ちた微笑で良太郎とモモタロスを見下ろしている。

隠れる場所などあるわけがない。

「ほんとにここって聞いたの？」

「間違いないって！俺は聞いたんだ」

疑わしげに見られてモモタロスはちよつとむきになっている。

視界の隅を小さな影が走った。……ような気がして神経を尖らせた。

なにか……いる。

「良太郎、ちよつと下がってろ」

肩に手をやって後ろに下がらせた。自分は前に進み出る。

「何者だお前達」

「ここは森里家にとって神聖な場所、むやみに足を踏み入れる

ことは許されない」

小さな声が二種類。

しかし方向がつかめない。何処からの声なのか。

「何処だ、姿を見せやがれっ！」

モモタロスソードを抜いた。

「笑止。そのような大きな得物で我等を撃つつもりか」

「敵対行動と認識する」

モモタロスの右足が彼の意思とは関係なく浮き上がった。

「うわっ」

派手な音を立ててモモタロスは後ろにひっくり返った。思いつき

り後ろ頭を打った。

右足だけを天井に向けたまま不恰好でバランスの悪い姿だ。

「なんだこりゃ、足が……」

戻そうと思うのだが何かに吊り上げられたように動かない。

眼を凝らしてよく見ると細い糸が右足に絡まって天井から釣っていた。どんな材質なのかイマジンのモモタロスが足搔いても切れる気配はない。恐ろしく強靱な糸だ。

「カーボンナノチューブの糸だ。ちょっとやそつでは切れないぞ」

「まて、木霊、火狩。彼らは客人だ」

「本当か？ 覗見」

「間違いない、放してやれ」

びゅうん

第三の声の指示で糸が解けた。糸が空を斬る音がして足が自由になった。

「なんなんだ？」

「ええっ？」

良太郎は思わず眼を擦ってしまった。

立ち上がったモモタロスの1メートルほど先に小さな三つの影。

身長は五センチぐらい。忍者の衣装を身に纏っていた。性別はよくわからない。

真ん中の忍者が一步進み出た。

「失礼した。我等はこの場を守護する者、あたしは幻惑の木霊」

「閃光の火狩」

「千里眼の覗見」

左右の忍者が口を開いていた。

忍者マスター達は軽く頭を下げこそしたが立ったまま膝を突こうとはしなかった。

モモタロスは彼らの前にしゃがみこんだ。

「小っちゃいなあ……なんだお前らは」

「——だから言っただろう。この場を守護するものだ」と

「同じ事を何回も言わないと判らないのは頭の悪い証拠だね。ねっ、火狩」

「あまり動かないでくれ、見た目には判らないが、セキュリティが縦横に走っている——いま、解除する」

視見は懷から携帯電話のような機械を取り出して操作した。

おずおずと良太郎が。

「う……動いていいのかな」

「ああ、問題ないぞ」

告げられて良太郎も彼らの前にしゃがみこんだ。

「あの……僕達ベルダンディーさん達に話があるんだけど、何処に行ったのかな」

「俺がここで寝るって聞いてるんだ、何処に行ったのか白状しやがれ」

やくざが脅しを掛けているような口調だ。相変わらずの奴だなモモタロスは。

顔を見合わせる忍者マスター達。

「ベルダンディー様達なら「ゆりかご」の中だ」

「「ゆりかご」？」

「眼には見えないがこの中心には亜空間への入り口がある」

「その亜空間のことを私達は「ゆりかご」と呼んでいる」

入り口があるだけで誰でも入れるわけではないらしい。開ける力とパスワードがないと中には入れないそうだ。

どうにもよくわからない。

どうしてそんなものがここにあるのか。

「ベルダンディー様が愛鈴様を出産されるために造った亜空間さ」

「半神半人とはいえ一人の神が産まれるのだ、並みのことではない」
産まれて来る子供や母体への影響や世界への影響なども考えての事だと。

「出産が済んでも亜空間は温存されて育児室として利用されたのだ。

ゆえに我等は「ゆりかご」と呼んでいる」

「こんな時間に何の用だ？ いささか非常識だぞ」

非常識と言うなら彼らの存在そのものが非常識なんだが。

いや、良太郎もモモタロスも人のこと言えないか。

「急ぎの用事でないなら明日の朝にして欲しいものだ」

「親子三人水入らずだしね」

「特に愛鈴様にとってはとても大切な場所だ。ご自分から出てこられるまで、我等としては邪魔をしたくない」

じろり、と三人に睨まれて良太郎は引いてしまった。

プライドと忠誠心。忍者マスター達が膝を折るのはベルダンディや娘の愛鈴だけらしい。

「あ……いや、いいんだ。——でも、参考までに中ってどうなるのかな」

問われて忍者マスター達。

困惑顔である。

「……と言われても……この間入ったときにはでかいキッチンだったな」

「あたしが入ったときは一面のお花畑だった」

「私の時は大きなベッドがあって……子供部屋って感じだったな」
モモタロスが呆れた声を出した。

「なんだあ、ばらばらじゃないか、いったいどれが本当なんだ？」

「どれも本当さ」

この中の空間は主となる者の意識、必要に応じて変化するらしい。今は親子三人となると中の様子はどんな感じになっているのだろう。

「まあ、不便だったり、不快な空間ではないことは確かだよね」
モモタロスは良太郎の肩を叩いた。

「……だってさ、納得いったか？」

「う、うん」

本堂を離れて母屋に戻る。

途中。

「おい、良太郎、話があるんだが」

「——ええっ、僕は嫌だよ」

「なんで？」

「理由がないよ」

「お前になくても俺にはあるんだよ」

良太郎は横目でモモタロスを睨んだ。

「お前は悔しくないのかよ！」

「オーナーに「節度を持った行動」をとるように言われたよね」

「んなもの関係ねえよ！」

「乗車拒否されても知らないよ？」

瞬間、モモタロスは硬直した。

生あくびを良太郎。

「もう遅いからこの話は明日にしようよ」

取り付く島もない。

モモタロスは苛立たしげに足元の石を蹴飛ばした。

「ええい、くそっ」

思いのほか石は飛んで茂みの中に。

「いて」

「なんだ？誰かいるのか？」

闇の中に眼を凝らした。

翌朝。

十六畳になっている「みんなのティールーム」の中で大きなテーブルをみんなで囲んで朝食。

賑やかである。

「おしょうゆとって、お醤油」

「リュウタ！溢さないのっ」

「このおかずもらいつ、答えは聞いてない」

「味噌汁うまいでえ、泣けるでえ！」

「ほんとに美味しいよ、僕は釣られている」

ベルダンディーはお茶碗にご飯を盛りながら。

「みなさん、まだありますからたくさん食べてくださいね」

「はい」

「ありがとう！」

元気な答えにベルダンデイーの笑顔。

こんな時の彼女はほんとに幸せそうだ。

オーナーはいつものチャーハン。スプーンを手にながら。

「ところでモモタロス君が見えませんがどうしたのでしょうか」

「さあ、昨夜から見てないね」

「そう言えばいないわね」

「ご飯時にいないなんてどうしたのかな」

「良太郎、知らない？」

彼も今気が付いたようだ。薄情な奴。

昨夜の会話を思い出した。

慌ててズボンのポケットを探してみる。

「あ——パスがない。まさか、あいつ」

とっても嫌な予感。

誰かに憑かなくても、実体を持つようになったイマジンⅡモモタロス達は、電王のライダーパスがあれば変身できるようになった。た。

「えっ、」

場に緊張が走った。

コハナが良太郎ににじりよった。

「どういうこと？」

「あいつリンドさんに負けたのが悔しかったらしくて、もう一度戦いたいから僕の身体を借りたと言って来たんだ。誰かを傷つけたわけじゃないし、そんなの戦う理由にならないから、僕は嫌だつて断ったんだけど」

「じゃ……あいつ、誰か憑く相手を探しに？」

そうは言っても誰でもってわけじゃない。

電王の場合、憑く側と憑かれる者との意識の統一が力に大きく影

響する。

より大きな力を欲するならば単独で変身ではなく誰かに憑くことが必要だ。

気まぐれなイマジン達と気持ちを合わせることが出来るのは、長い間共に戦ってきた良太郎だからと言っても過言ではない。

庭から悲鳴が聞こえた。

閉めていた障子を開けて飛び出す一同。

シーグルが右肩を押さえて倒れていた。破れたブラウスの肩から壊れた部品が見えていた。

本堂のほぼ正面に立つ人影。

「あいつは……！」

螢一達にも緊張が走った。

悪魔の衣装、赤い瞳、赤いメッシュの入った髪、額に悪魔の紋章。驚いて口元に両手をあてるベルダンディー。

「マーラー！」

て、誰？

良太郎サイドは初対面だ。

「知り合いの魔属です。時々遊びに来られます」

「お姉様、あれは遊びに来てるんじゃないかってっ」

「えーっと、つまりね」

ウルドの説明。

天上界、地上界、魔界、この世界は三つの世界のバランスで成り立っている。天上界の神属は地上界の「幸福の波動」を、魔界の魔属は地上界の「不幸の波動」を活動減としている。

どちらが悪でどちらが善だとかは意味のないことだ。光がなければ影がないように、光だけでも存在することは出来ない。また、地上界も魔界と天上界のコントロールにて成り立っている。

共に属するものが違うというだけだ。

その証拠に三界は環境がとてもよく似ていて相互の混血も可能だ。地上界の人間の数は限られている為、常に魔属と神属は地上界で

いく。

「くっ、この！戦えええつ、こらあ！」

「太刀筋が甘い」

「このお！」

「力任せに振り回しているだけでは避けてくださいと言っているよ
うなものだ」

電王Ⅱモモタロスはパスを取り出した。

「ああ、そうかい！それじゃ、これならどうだよっ」

バスをベルトのバックルにセタッチする。

Ⅱ「FULLCHARGE」Ⅱ

「もう一発！」

Ⅱ「FULLCHARGE」Ⅱ

「いくぜっ」

デンガッシャーを腰を落とし気味にして構えた。

「俺の必殺技、特別編！」

切り離された刀身がリンドを襲う。

「攻撃は受け止める必要はない。避けてしまえばいい」

むしろゆっくりとした動きでリンドは回避してしまった。

外れた刀身は地面の中にめり込んで消えた。

電王Ⅱモモタロスはリンドに向けて突っ込んでいく。これも回避
された。

「避けることが出来なければ力の方向を逸らすだけでいい」

電王Ⅱモモタロスとリンドの位置が入れ替わる。

「特別編と言っただろう！」

リンドの足元の地面から消えた刀身が飛び出してきた。

右足を大きく後ろに。まるで待っていたかのように、伸ばした右
手の人差し指と中指で刀身を弾いた。刀身は数倍のスピードで、
モモタロスの頬を掠めて、はるか後ろの立ち木の幹を数本貫いてく
いこんだ。

「もっとも大切なのは相手の攻撃ポイントの予測だ。これは個人の

格闘だけではなく、集団での戦術も同じだ」

あまりの速さに一步も動けない。

冷たく乾いた声。

「どうした？もう終わりか？初手など交わされて当然、常に二手先、三手先を組み立てておくものだ」

「くっそお~~~~~!!」

屈辱に身を灼く電王Ⅱモモタロス。

モモの字、もういい、お前の負けや。

先輩無茶しないで。

やめろっ、モモタロス！

仲間達の声も聞こえていないようだ。

電王Ⅱモモタロスから吹き上がる禍々しい魔気。

ベルダンディー達三女神の顔色が変わった。

「これは……!!」

「お姉様っ!」

「ベルダンディーっ、これは!」

装着されていた電王のオーラアーマーと電仮面が分解再構成された。

Ⅱ「DEMONFOAM」Ⅱ

基本的にはソードフォームと似ているが奇妙にねじくれて左右非対称だ、色も暗く毒々しい。

「く、くくくく……」

マラーの声だ。

「そんなに情けない思念こゑあげなくても、契約は果たしたじゃないか。一級神リンドとの戦いがお前の望みだったよな」

デンガッシャーを組み立てている。

ソードモードだが、もとの電王のものと比べると一回り大きく、刀身は湾曲して両刃ではなく片刃だ。

「ここからは代償をもらおう。——そうさ、私の時間タインだ」
切っ先が女神達を指す。

「さあ。女神ども勝負だ！」

リンドはむしろ呆気にとられている。

ベルダンディーが前に進み出た。

その手を引っ張った小さな手があつた。

「お母様、ここは私が」

「ん？——大丈夫？」

「もちろん」

愛鈴のにつこりと天使の微笑み。

その小さな肩に良太郎の手が置かれた。

「いえ……僕がやります」

「でも、あれはモモタロスさん……」

「だからこそ、共に戦ってきた大切な仲間だからこそ、僕が、僕達が止めてあげなくちゃいけないんだ」

良太郎の決意の瞳。

こんな時の彼は別人のように頼もしく見える。

きざっぽくポーズを決めてウラタロス。

「ふっ、しょうがないね。——お前、僕に釣られてみる？」

首を鳴らすキンタロス。

「よし、よおゆうた、良太郎、泣けるで」

くるりとステップを踏んでリュウタロス。

「相手が誰だって、僕は倒すよっ、いいよねっ、答えは聞いてない！」

「オーナー！」

天に向かって掲げられた良太郎の手の中に予備のライダーパスが飛び込んだ。

良太郎の腰にデンオウベルトが巻かれた。

「変身！」

四人の女神達の間で視線が交錯する。

頷きあう。

この場を愛鈴と良太郎達に任せることにしたようだ。

「オーナー！」

天に向かって掲げられた良太郎の手の中に予備のライダーパスが飛び込んだ。

良太郎の腰にデンオウベルトが巻かれた。

「変身！」

リュウタロスが良太郎の身体に吸い込まれる。

Ⅱ「GUNFOAM」Ⅱ

すばやくデンガッシャーをガンモードに組み上げた。

遠距離からの速攻で、相手に反撃の機会を与えず仕留めるのが、
電王Ⅱリュウタロスの特性である。

銃口を向けて連射。

電王Ⅱマーラーは避けもしなかった。

撃ちだされた光弾は、電王Ⅱマーラーに届くことなく、綺麗な曲線を描いて電王Ⅱリュウタロスとギャラリーを襲った。

「わわわっ」

「きゃあ！」

「危ないやないか！」

直撃を受けたものはいなかったけれど、地面に着弾して土や石が飛び散った。

回りこんで角度を変え間合いを詰めようとする電王Ⅱリュウタロス。

電王Ⅱマーラーは持っていたデンガッシャーを分解して空中に放り上げると自分から間合いを詰めた。

電王Ⅱリュウタロスの右の回し蹴り。軸足を払われて転んだ。

落ちてきたデンガッシャーはサブマシンガンのような形状をしていた。受けて銃口を向ける電王Ⅱマーラー。

「うわっ」

慌てて転がって避けた後の地面にうがたれる巨大な穴。

起き上がりながらベルトのバックルにパスをセタタッチした。

Ⅱ「FULLCHARGE」Ⅱ

「お前なんか嫌いだっ！」

デングァッシャーと両肩のドラゴンジェムからエネルギー弾が発射された。

「ワイルドショット」のエネルギー弾は眼に見えない壁に弾かれて電王Ⅱリュウタロスに戻っていく。

——いけない、とまれ！——

愛鈴の小柄な背中に天使の翼が広がった。翼の後ろに大きな光の輪。スピードではなかった。まるでビデオのこま落としのように、突然現れ彼を庇って愛鈴は立っていた。

咄嗟のことで良太郎サイドは気がつかなかったけれど。

エネルギー弾は天空に弾き上げられた。

「あ、あ、あ……」

発射ポーズのまま尻餅をついている電王Ⅱリュウタロス。

「代われ！リュウタ！」

リュウタロスは飛び込んできたキンタロスに弾き出された。

オーラアーマーが再構成されて電仮面が変わる。

Ⅱ「AXEFOM」Ⅱ

「お嬢ちゃん、どいとき」

アックスフォーム

電王Ⅱキンタロスは、愛鈴を押しつけて前に出ると、顎に手をあてて首を鳴らした。

「俺の強さにお前が泣いた」

デングァッシャーをアックスモードに組み替える。パスをベルトにセタッチした。

Ⅱ「FULLCHARGE」Ⅱ

「そんなんっ、いきなり！」

コハナの言葉が終わらないうちに、デングァッシャーが天へ舞い上がる。

電王Ⅱキンタロスは大地を蹴っていた。

上空から金色の軌跡を描きながら落ちてくる斧。

見えない壁を叩き割ったが。

しかし。

「どうした」

電王Ⅱマラーにあたる直前でダイナミックチョップは止まっていた。

「う……」

「やらないのか？知ってるよ、いや、こいつの記憶を読んだ。お前は仲間だった者を撃てるほど非情にはなりきれない」

モモタロスの人質に取られているようなものだ。

電王Ⅱキンタロスの腹部に向けて銃火が奔った。

吹っ飛んだ。

地面に横倒しになる。

「耐久力だけは一人前だね」

「キンちゃん！」

Ⅱ「RODFOAM」Ⅱ

ロッドフォーム

キンタロスと交代した電王Ⅱウラタロスはすばやく起き上がった。

「僕には出来るよ」

「そうかい？悪魔に対して嘘をつくと代償は高いぞ」

互いに得物を組み替えた。

電王Ⅱウラタロスは物干し竿のようなロッドモードへ。

電王Ⅱマラーはソードモードへ。

ロッドがソードに弾かれた。

「なっ、早い！」

電王Ⅱマラーのデングァッシャーは本家のものよりも一回り大きくて刃の肉厚も厚い。かなり重そうなのに軽がると片手で振り回している。

互いに得物の最適な間合いを取ろうと動き回る。

二度、三度、間で得物が打ち合わされた。

スピードもパワーも電王Ⅱマラーのほうが上回っている。

良太郎が先ほどこからモモタロスに呼びかけているが聞こえないようだ。

「無理だよ、契約で縛られているからな」

「契約だって！」

「リンドとの戦いの代わりに私に身体を預けるとね」

「先輩、なんて馬鹿なことをっ！」

ロッドとソードが打ち合う。明らかに電王Ⅱウラタロスのほうが押されている。

マーラーは電王の力に魔力を上乗せしている。

これでは良太郎達に勝ち目はない。

「くそっ、あたりさえすれば！」

「じゃあ、あててみな」

電王Ⅱマーラーの動きが止まった。

電王Ⅱウラタロスは一瞬の間にベルトにセタッチした。ロッドモードのデングァーに光のラインでエネルギーが供給される。

Ⅱ「FULLCHARGE」Ⅱ

投擲されたロッドが六角形の光のラインに展開して電王Ⅱマーラーを縛る。跳躍する電王Ⅱウラタロス。

「デングァーキック！」

電王Ⅱマーラーの胸板に弾き返された。

「ふんっ、小技を」

「そんなばかなっ！」

つぶれたカエルのように電王Ⅱウラタロスは地面に這いつくばっている。

螢一がぼそりと呟いた。

「なあ、あれってマーラーだよな」

ベルダンディーは意味がわからず聞き返してしまった。

「なんですか？」

「電王になってもモータロスに憑いていてもマーラーなんだよね」

「——あ！」

起き上がった電王Ⅱウラタロスの手からロッドが弾き飛ばされた。

返す刀でけさがけに一撃。

吹っ飛んで横倒しになったオーラーアーマーの胸に大きな傷。

「そろそろ前座は退場してもらおうか」

電王Ⅱマラーはパスをベルトにセタツチした。

Ⅱ「FULLCHARGE」Ⅱ

「くっ、」

身構える電王Ⅱウラタロス。

愛鈴の声が響いた。

「いけっ、ばんぺい！対マラー用特殊弾発射！」

ばんぺいは陣笠をはずした。その後の頭からランチャーがせりあがる。

しぼん

ちと気の抜けるような音がして、電王Ⅱマラーにばらばらと小さなものが降りかかった。

お守り、大吉のおみくじ、破魔矢、達磨……ETC. ありとあらゆるめでたい物のオンパレード。

一瞬の間の後。

ものすごい悲鳴。

電王Ⅱマラーのアーマーが分解した。

モモタロスとライダーパスをその場に残して、マラーのマントが翻る。上空へ逃げていこうとする。

「なんだかよく判らないけど、逃がすか！」

パスをベルトにセタツチした。ロッドモードのデンガッシャーに光のラインでエネルギーが供給される。

Ⅱ「FULLCHARGE」Ⅱ

投擲されたロッドを小さな手が掴み取った。

「な……なんだって」

「だめです」

背中に天使の翼を広げた愛鈴だ。

「逃げる者を撃ってはだめです」

キンタロスとリュウタロスが色めき立つ。

「なにゆうとるんや」

「逃がさないよ！」

リュウボルバーの銃口を向ける前に愛鈴は立ちはだかった。

「撃ってはだめです」

「何でだよ逃げちゃうじゃないか」

もう手遅れだった。マラーは転移術で消えてしまった。

愛鈴は背中の翼を収めて地面に降りた。

「拳に拳で返してはいつまでも終わりません」

手にしていたロッドモードのデングァッシャーを電王Ⅱウラタロスに差し出した。

時して否応なく戦いを選ばなくてはならない場合もある。けれど今は。

「私達は選ぶことが出来ます。戦うこと、戦わないこと。どちらも勇気のいることです」

電王Ⅱウラタロスはひとつ肩を疎めるとデングァッシャーを分解して腰に収めた。

オーラアーマーが分解されて良太郎が後に残る。

「僕達の負けみたいだね」

「そうだね。ウラタロス」

「正しい選択だと思います。大きな力を持つ者にはそれと同じだけの責任と義務もあるのですから——ですよね、お父様、お母様」

螢一は娘を抱き上げた。

「そうだよ、えらいぞ、愛鈴」

「ね、お母様、この後森に「癒し」に行くのでしょうか？」
ベルダンデューの微笑み。

「ええ、そうよ」

「この方達に見せてあげてはどうかしら」
「素敵ね」

ウルドが愛鈴の頭をなでながら。

「じゃあみんなで行きましょうか」

「はい。ウルド姉様」

スクルドは壊れたシーグルの肩を見ている。

「よかった。これならすぐ直るわ」

ナオミがもつともな疑問を口にした。

「でも、どうして逃げて行っちゃたんですかね」

「マラーはめでたい物アレルギーなのよ。相変わらず詰めが甘いわね、あいつは」

数刻後。

デンライナーの墜落地点。

へし折られた樹木と抉り取られた大地。昼間の光の中で見るとより痛々しく見えた。それが一キロ以上も続いている。

上空に浮かぶ女神達はそれぞれの女神服Ⅱ天衣を身に着けていた。ベルダンディーは胸に手をあてている。

「ではいつも通り私が主旋律で」

「ねえ、たまには私にやらせてよ」

スクルドのおねだり。

ウルドは疑わしそうに。

「あんたで大丈夫？」

「あたしだって勉強しているのよっ」

「うふ——そうね、じゃあお願いできるかしら」

「まかしてっ」

地上で見上げている、良太郎達と愛鈴、螢一。リンドは休暇が終わってしまったので天上界に戻って行った。

ナオミが好奇心と不安の混じった眼でオーナーに聞いた。

「何が始まるんですか？」

「すぐ判ります——ほら、始まりますよ」

ベルダンディーの唇が旋律を紡いだ。続いてウルド。最後にスクルド。

旋律は絡まりあい溶け合ってひとつの大きな歌となっていた。

イマジン達と良太郎、コハナ、ナオミ、オーナー。もちろん螢一と愛鈴も、魂を奪われたように女神達の「歌」に聞き入っていた。歌い始めて数分、荒れた大地に変化が現れた。

緑の芽が吹き台地をおおっていく。折れた樹木も大地に根があるものは力を戻して緑の葉を伸ばしていた。

歌が終わった時には、元通りの森とまではいかないが、大地には活力が満ちていた。

「これは……すごいね」

イマジンも良太郎達もその効果に声もない。

愛鈴は片膝をつくともまだ蕾のかたい草に触れた。

ビデオの早回しのように花が咲いた。

「これが女神の力です。生きとし生けるものを慈しみ導いていくための力。戦うことが役目ではありません。でも時には力を剣として揮わなければならない……奇麗事だけでは、優しいだけでは、大切な人は、想いは守れません」

立ち上がるとにっこりと微笑んだ。

「だからこそ「お稽古」です——でも、本当は「奇麗事」で済んでしまうのが一番いいんですよね」

女神達が降りてきた。

「螢一さぁーん！」

手を振るベルダンディーに螢一も歩み寄っていった。

「素敵な歌だったよ」

「ありがとうございます」

ベルダンディーの頬が桜色に染まる。

ウルドは妹の肩をそっと押した。

寄り添う二人はまるで一枚の絵画のようだった。
ふうっ

他力本願寺の縁側に腰掛けて良太郎の溜息。

「森の癒し」から戻ってきた後、モモタロスは「みんなのティールーム」でコハナにたっぷり絞られている。

さぞや美味しい果汁が出るだろう。

「まったく……」

呟いて大きく伸びをした。

長い間一緒に戦ってきたのである。モモタロスの気持ちも判らないでもないけれど。

いくらなんでも今回のあれはないと思う。

もしかしたら自分が悪かったのか？

あの時にモモタロスに身体を貸してやればこんなことにはならなかったかもしれない。

「どうしたんですか？」

声に顔を上げるとベルダンディーが買い物籠を手にとっていた。

彼女に見つめられるとなんとなくごまかすことが出来なくて、想っていたモモタロスのことを話してしまった。

「そう、素敵ね」

「えっ？」

「そんな風に思える仲間がいるなんて素敵なことですよ」

「そ……そうかな」

「信頼されてるんですね。モモタロスさんを。仲間達を」

「いやあ……」

後ろ頭を掻く。

「でなければ今まで戦って来られなかったでしょう」

「うん、多分」

ベルダンディーは良太郎の胸に右手をあてた。

「この奥に強い光を感じます」

自分の胸元にも左手をあてる。

「とても強い光。身に掛かる不幸にもくじけない心。他人を思いやる優しさ。あきらめない勇氣。あなたの仲間はきつとこの光に魅かれて集まったのね——これからもまだ辛い事があるかもしれないけれど、大丈夫、自信を持って。あなたは強いんだもの……だから、頑張っ」

「うん、僕にはまだまだ力の足りないところがあるけど、頑張るよ」
大丈夫ね。

その光は女神の最愛の人が胸に抱くものと同じだから。

独特のミュージックホーン。

空間に虹色の歪みが現れて線路が何もない空中に敷設されていく。

「きたきた、デンライナーって……え？」

背伸びして線路が延びてくる方向を見ていた一同は、言葉を失ってしまった。

車体が青いデンライナー。

これって……。

まさか。

ドアが開いて顔を見せたのはターミナルの駅長だった。

「お迎えに参りましたよ。そして新しい仕事です」

オーナーが前に進み出た。

「話はウルド様から伺っております——幽霊退治ですな」

「ええ、ですが良太郎君とイマジン達にはターミナルで降りていただきます」

「向かうのは私とナオミさんだけですな」

ウラタロスはそれで全てを理解したらしい。

頷くと。

「でないと歴史が変わるわけだね」

「その通りです。では参りましょうか」

まずは未来へ——良太郎の孫、幸太郎を迎えに。

スクルドはウルドの問いかけに少女コミックから顔を上げた。

「んーなあに？」

「あれってさ、デンライナー、ほんとに車体の色を変えただけなの

「？」

「さあ……どうでしょう」

スクルドは楽しそうに笑っていた。
怪しい。

この子は何かをまともに修理したことなんて一度もない。

螢一のカメラを修理したときにはレンズから怪光線が出た。
懐中電灯をライトセイバーにしてしまうし。

確かに造ったのはスクルドだから何をしようと勝手ではあるけれど。

どんな事をしてあるやら……

「ま、いいか、余分な分岐点が増えなければ。私達にはやることがあるしね」

その為の「時の列車」なのだから。

愛しき鈴の音 外伝 「時の列車」

おしまい

D ー来訪者（前書き）

前作の「時の列車」とはつながっておりません。

ごく一部の分かる人には判るのですがこの話を思いついたのは某巨大掲示板です。

はつきり言って自分はディケイドが嫌いです。

資料もWEB上で確認できるものだけです、事実と違うことがあるかもしれませんが、そこは二次創作ということでご容赦ください。

D―来訪者

空間が歪んでいる。

鉛色のカーテンの向こうから一人の男が現れた。

トレンチコートに帽子を目深に被り眼鏡をかけている。

「またひとつ世界が破壊される。おのれディケイド」

台風が近づいているせいかどんよりと空は曇り風が強い。

秋風は落ち葉を運んで季節と思えないほど冷たく道を歩く人々は冬支度をしているものがほとんどだ。

朝方の通勤ラッシュは過ぎていくらしく人通りはまばらであった。道路を背にして右手に駅の入り口があった。高架線で地下鉄ともリンクしているかなり大きな駅である。左手にはドラッグストアやコンビニ、交番などがつづいている。少し遠いが地下駐輪場や駐車場などもあった。「ここは駐輪禁止区域です」と書かれている看板の前に数台の自転車と五十CCのバイクが乱雑に停めてあった。

門矢士は上着の襟を直した。ピンク色の二眼レフのトイカメラが首から下がっている。臍脂色のハイネックのセーターと黒のスラックス、ジャケット。

仲間のユウスケと夏美は光写真館に留まっている。先刻のファンガイアとグロンギの混合部隊との戦闘でユウスケが右足を負傷したからだ。

幾多の世界をめぐり戦ってきた。

望んで挑んだ戦いばかりではないが振りかかる火の粉は払わねばならぬ。

それでも戦う日々少し疲れを感じてきていることは否定できなかった。

つい数時間前にこの世界に来たばかりの彼は駅前の風景をカメラに収め始めた。

何度かシャッターを切った後カメラから顔を上げた。

さてどうしたものかと思案しているようだ。この世界はどうなんだろうかと。

やがてここにいても仕方が無いとふらふらと歩き出した。

光写真館に戻ってきた士は今しがた撮った写真を現像していた。

印画紙に浮かび上がる風景。

溜息。

「この世界も違うのか」

ピンぼけに捻くれたような風景写真だった。多重露光のように重なりあってさいるものもある。

どんなにシャッターを切ってもまともな写真は一度として撮れたことがない。

この世界も自分を拒絶している。

諦めと疲れ。空虚な想いの底に怒りが確かにあった。

いつまでこんな事を続けられいいのかと。

印画紙を動かしていた手がふと止まった。

「これは……」

歪んだ風景の中にその人物だけが正常に写っていた。

褐色の肌と腰まである銀髪。どこの国の風習なのか額と頬に三角形の紋章があった。

士は光写真館を飛び出した。

「おいっ、この女を知らないか」

通行人に片っ端から声をかけ始めた。

横柄な態度に、訝しげな者や関わり合いになりたくない、頭を振って逃げていくものがほとんどだったが、何人目かの小柄な女性が知っていると云った。

眼鏡をかけて髪を日本人形のように綺麗に切りそろえカチューシャをした女の子だ。

「ああ、ウルドさんじゃない」

「ウルド？」

「私の先輩のお姉さんです。街の北側の丘の上にあるお寺に住んでいます」

士は何か頭の中に引っかかるものを感じて首をかしげていた。

「ここからだとかかなり距離がありますよ。一番のバス停から乗って三〇分ぐらいですね。『他力本願寺前』で降りてください」

女性は軽く頭を下げるともう用はないとばかりに跡も見ずに歩き出した。

聞いてたいのかいないのか、士はやがて何か思い当たったらしく小さく頷いた。

「大体わかった。ここは『ああっ女神さまっ』の世界か」

スクルドは両手を上にあげて大きく背伸びをした。長い黒髪が風に揺れる。

足元の洗濯籠から洗い終えた物を取り出して物干しに掛ける。もちろん彼女の背丈では届かないので法術を使って空中に浮きながらだ。

「三時頃までは大丈夫よねえ」

曇った空模様のことだろう。風があるから十分に乾くはずだ。

地上界に降りてきてかなりの時間が過ぎた。はじめは失敗していた家事ももうすっかりなれてしまっていた。

腰のあたりから可愛い電子音がした。

正面の山門にいるばんぺい君からの緊急コールだ。

「――？誰か来たのかしら？」

来客の予定はないのだけど。

山門をくぐると石段の下にばんぺい君がいて、前に見知らぬ男が立っていた。

若い男である。童顔ではあるがなぜか何かに疲れているような感じをスクルドは受けた。数限り無い経験をしたものにしか出せない

年輪のようなものがその瞳にはある。虚無というべき達観と諦め、内に秘める激しい闘志。

「ピウイ？ キューイ？」

ばんぺい君は首だけを回してスクルドを見た。

通していいのか聞いているらしい。

「ばんぺいくん、下がっていいいわよ」

指示を与えると石段を登って山門の脇に立った。定位置だろうか。交代でスクルドが降りて彼の前に対峙した。

「家に用かしら？」

つっけんどんな言い方だけれど、角の立つ感じはなく、可愛らしくてむしろ微笑み返したくなる。

「えーっと、ノルン三姉妹の末っ子、スクルドだったな」

対してこちらは刑事の尋問かヤクザのガンつけに近い。

スクルドは問には答えず眼はかたわらのバイクに向けられている。

他力本願寺までマシンディケイダーを使ったのだ。

少々珍しい形をしているが昨今のマシンのデザインを考えるとありと言えなくもない。

「すごい、すごいっ、陸・海・空・宇宙空間での走行、ミラーワールドへの突入や並行世界の移動や無人での自動走行まで出来るのねっ」

さすがに一目見ただけで性能を見ぬいてしまったようだ。

目を輝かせているスクルドであった。マシンディケイダーの周りをくるくると移動しながら様々な角度で眼を皿のようにしてだ。

「あんた、ディケイドでしょ？ なんの用かしら」

視線も向けずに士のことはまるで眼中に無い。「マシンの持ち主だろうからついでに尋ねた」とそんな感じである。

神経質に目を瞬かせる士であった。

常は「世界の破壊者」と忌み嫌われたりするのに本人を無視してマシンに興味深々なのである。

懐から件の写真を取り出した。

「この写真だ。なぜお前の姉だけが正常に写っているんだ？」

「どうやら士には「ああっ女神さまっ」の一通りの知識はあるらしい。」

「ん？、とでも表現するしか無い空白があった。」

「俺の撮る写真は一度としてまともに写ったことがない。なのにこれはどういう事だ？俺には過去の記憶がない。もしかしたらお前達が何か知っているのかと思ったのさ」

「——ああ、なんだ。そんな事か」

突きつけられた写真を一瞥してだ。

彼にとっては「そんな事」と、切って捨てられて心外そうに顔をしかめていた。

「世界の支配率の問題よ。この世界ではあなた達仮面ライダーよりも私達の支配率が高いの。これはそういう事なのよ」

さらにバツサリとやられて士は啞然としている。

やがて憤慨に変化したようだ。顔を真赤にして。

「馬鹿なことを。いつまでも小学生のママゴトみたいなことをやっている漫画に「仮面ライダー」が負けるわけがない」

今度はスクルドがキョトンとしている。

「小学生のママゴトって？」

「森里螢一とベルダンディーの間だ。いつまでたっても進展しないだろ。ネタ的にも同人誌みたいなのをしているしな」

切り替えされてポカンとしていた。

何のことだかわからないと首を傾げて、しばし。

「お姉さまと螢一ならもうとっくに男と女の関係だけど」

「そんな事あるはずないだろう。だったらあの漫画はどうなるんだ」スクルドは呆れ顔である。

「撮影に決まっているじゃない。撮影よ、さ・つ・え・い。漫画でやっていることは全部お芝居よ。大体、あんな大学生が今時いるわけ無いじゃない。一緒に暮らし始めて一週間で二人は結ばれたんだから。ホントは螢一ってね、わりとそんな事はマメなのよ。子供の

いる今でこそ節制しているけどはじめの頃は朝晩だったって。……素敵よねーっ、女神と人間の愛……」

頬を染めて胸の前で祈るように手を組みうっとりとしている。

「お姉さまと螢一が深く愛しあっているのはあたしもよく理解できるし、妹としてとても喜ばしいことだわ」

「ま、まて、まてまて。お前は二人の交際には反対じゃなかったのか？　というか、子供って何だ？　妊娠している様子などまったくなかったぞ」

「だ・か・ら！　お芝居だって言ってるじゃない。全部脚本通りの演出よ。心が重なれば身体も重ねたくなるのはあたり前のことだし自然なことだわ。あと、私達を何だと思っているの。女神なのよ。光の屈折点を変えて普段どおりの姿に見せることぐらい造作も無いわ」妊娠をしているように見えなかったのは法術だと。

「一時期スキヤンダルみたき騒がれたけどね、こっちの世界ではもうみんな知っていることよ。私達が女神であることも含めて」

当初から長期の連載が企画されていて、いずれはそういう話も作られるかもしれないが、制作者サイドとしては「まだ段階として早い」と判断したらしい。アニメ化もされて人気が高い時期だっただけに慎重になったのだろう。

混乱しているのにさらに畳み掛ける。

「ついでに言うておくとお姉さまも螢一もここにはいないわ。普段は猫実工大の近くのマンションに住んでいるの。ここへは撮影があるときにだけ、月に何度か来るだけよ」

住めないわけではないしスクルドもウルドも他力本願寺を気に入っていたから。

「ウルドとあたしが降りてきてからはエッチも自由にできないし、いっくら姉妹でもきがねってあるじゃない？　出演料で収入も安定したしね——ウルドもいい人見つけたから、お互いにいいと話したのよ」

「ウルドにいい人？　トルバートルか、あの優男」

「馬鹿言いなさいっ、ウルドはあんなの趣味じゃないわ。もっとストイックでかっこいい人が好みなのよ。一級神特務限定キリコ——」
「親衛隊特殊任務班X—1」に所属している——リンドのお兄さんよ。漫画のはお芝居だと何回言えば……」

先月結婚式を執り行なったばかりの新婚さんよ。

二人が今のような間柄になるには結構なドラマと長い交際期間があったのだけれどここでは省いておこう。

「キリコ、聞かない名前だな」

本来の物語に存在しない登場人物が関わってきたりするのはいつものことだけど。

納得がいかない士である。

いやいや、この際彼らのことなどどうでもいい。

「世界の支配率」などと持ち出されては黙っていられない。とひとつ首を振った。

「ともかくウルドはここに住んでいるだな。今いるのか？」

スクルドはこめかみに手をあてた。

「ウルドに聞いたって答えは変わらないと思うけど……今はいないわ。キリコ義兄さんとおでかけ」

「では待たせてもらおう」

図々しくも横柄にスクルドの前を通りすぎてさっさと石段を登る。軽く溜息をつくとスクルドは後に続いた。

先程電話で連絡があったのだけれどベルダンディーと螢一が愛娘の愛鈴を連れて遊びにくるのだ。

撮影以外でこちらに来るのはしばらくぶりのことだし出来れば邪魔をしてほしくないのだけれど。

どうせ言っても聞かないしと、とりあえず自分を納得させた。

台所の隣の茶の間に士を通した。茶箆筥を開けて急須と湯呑を取り出した。お茶菓子の饅頭も出して添える。

士はちゃぶ台の前にどっかりと腰をおろしていた。

「随分手馴れているじゃないか」

出された湯のみを一口すする。

ちよつと意外そうな顔で。

「旨いな、こんなに旨いお茶ははじめてだ」

夏美とユウスケがこの場にいたら眼を丸くするに違いない。

「んふふ、でしょう？お姉さまにも評判いいんだから。お茶菓子もどうぞ。あたしが作ったのよ」

「——確かに。これなら店に並べて売り物にできる」

士が他人を褒めることなど驚天動地だと。

「ごめんなさい、干し物の途中だから失礼するわ」

その場を外すことしばし。

部屋の中が綺麗に片付けられているのは知識のとおりだけれど。

「……どうやらこの世界も俺の知っている世界とは少し違うらしい」
程なくして戻ってきた。

「ベルダンディーがここにいないとすると家事はお前がしているのか」

「あたしとウルドと交代でやっているわ。ああ見えても結構家庭的で家事とかは好きなのよ。ウルドは」

自分の湯のみをすすると。

「それに来月になったら一人暮らしになるから家事ぐらい出来ない
とね」

「一人暮らしだと？」

ウルドはどうするのだろう。

「正確にはシーグルとばんぺい君と三人ぐらし。ウルドとキリコ義
兄さんは来月から天上界に新居を構えて住むのよ」

「そりゃおめでとう」

まるで棒読みの台詞はいかにも士らしい。

「この間の試験でウルドは一級神に昇格したの。だから天上界での
女神としての仕事があるのよ。キリコ義兄さんだって仕事があるし
ね」

キリコはレッドソルジャー部隊のしかもパーフェクトソルジャー

勲章すら持つ優秀な人だと。

だからこそあまり天上界を離れてもいられないし、尽くすタイプのウルドとしてはそばを離れたくないわけだ。

「だとすると撮影はどうなるんだ？」

「必要な時だけこっちに降りてくることになるわね。専用のゲートももう作ってあるわ」

「やれやれ……お忙しいことで」

皮肉たっぷりの口調だけれどスクルドには通用しなかった。

玄関でベルダンディーの声がした。

「姉さんっ、スクルドっ、キリコ、いますか！」

スクルドが出て行くと険しい顔をした姉が土間に立っていた。

スカイブルーとホワイトの長袖のワンピースを身につけている。

二歳から三歳ぐらいの小さな女の子が傍らにいて膝丈のフレアスカートにしがみついていた。黒髪でコバルトブルーの瞳。螢一とベルダンディーの面影がある。

ただならぬ様子に、普段なら愛鈴に駆け寄って頼ずりするのに、忘れて硬直してしまっていた。

「——ど、どうしたの？お姉さまっ」

怒っている時のベルダンディーは本気で怖い。姉のウルドや同じ一級神のペイオースすらも恐怖するぐらいに。

「どうしたもこうしたもありますかっ、螢一さんよっ、あんな人だとは思わなかったわ」

「おお、おち、落ち着いてっ、お姉さま。らしくないわよ。何があったの？」

ともかく落ち着かせようと娘を使ってみる。

「愛鈴もびっくりしているわ——ねえ」

愛鈴は無言で母親を見上げている。

少しだけ落ち着いたのかベルダンディーは娘に優しい微笑を向けた。

「とにかく話が見えないんだけど」

「螢一さん、私に隠れて千尋さんと浮気していたんです。それもこの娘が生まれる前から」

「――はあ？」

まさしく眼が点状態のスクルドである。

螢一は誠実が服を着て歩いているような奴なのだ。

「私は荷物をまとめて天上界に戻ります」

「ちょ……連載はどうなるのよっ」

「監督と脚本の先生に訳を言って中止にしてもらいますっ、もうあんな人とは一緒にいられません。スクルド、私は愛鈴を連れて天上界に戻りますがあなたも一緒に戻るのです」

今から行ってきますから。

愛鈴の手を引いて背中を向けた。

あまりのことに後を追うことも忘れてその場に立ち尽くしたまま。

「ど、どどどどど……どうしよう」

天才肌であるためかイレギュラーには弱いらしい。

後ろにいた士が。

「おい、追わなくていいのか？」

あたふたしていたのが我に返る。

こうなってしまうとベルダンディーをとめることが出来るのは存在しない。

玄関を飛び出して。

「――れよりも事実確認だわ――ばんぺいっ！」

「おっと、悪いがそいつよりもこっちの方が早い」

マシンディケイダーを呼び寄せる。

事実であるから尚更反発したくて、でもそんな場合ではないと抑えた。

「なんで？」

「なんか面白そうだからな」

のれ、の言葉に素直に従う。

ともかく二人の住んでいるマンションに向けて走りだそうとした

時。

鈍色のカーテンが二人の前に現れ醜怪な一団を吐き出した。

ファンガイア、イマジン、魔化魍、アンデッド、その他もろもろ。総勢で三十名はいそうだ。

群れが二つに分かれると中から白いストライプのスーツを着た男が進み出てきた。黒いネクタイに黒い手袋。なかなかダンディだが瞳にはこわい物があつた。邪気とでも言えはいいのだろうか。

「ここにいたかディケイド、門矢士」

「ガイ——」

心底迷惑そうに顔をしかめた。

「こんな場所まで追いかけて来たのかご苦労なことだな」

「なんとでも言うがいいのだ。今日こそお前を抹殺して我が大ショッカーがすべての世界をひとつにし、すべてを手に入れるのだ！」

ガイの腕が振り下ろされるとモンスター達が一齐に土へ殺到する。

「売られた喧嘩は勝ってやるぜっ！」

ディケイドライバーを腰に装着してライドブッカードからディケイドのカードを取り出した。

「変身！」

『カメンライド、ディケイド！』

ピンクと黒と白、緑色の大きな眼、ある意味襲いかかる怪人たちと大差ない醜悪な姿。

左右からパラドキサ・アンデッドとライオンファンガイアが襲いかかる。

攻撃をかわしかいくぐってケータッチを取り出した。

「なに！」

画面が暗転していた。

指を走らせるが何も反応がない。

慌てて他の仮面ライダーのカードを確認する。上下の装飾で、カードであると判別できるだけで、仮面ライダーが描かれているはずの部分は真っ白になっていた。

「なぜだっ！」

「……世界の支配率の問題だと、何度言えば……」

呆れているスクルドにもモンスターたちが襲いかかる。

シーグルが掴みかかるドロタボウとバケネコの間に割って入った。
長いロッドを振り回して魔化魍を打ち据え退けた。

「大丈夫ですか」

「ありがとう。……なんで私まで」

「仲間だと思われたのでは」

「迷惑だわ」

本来女神達は争い事が嫌いなのだ。

「まったくだな」

とディケイドはカッシスワーム・デイミディウスにパンチを打ち込む。

ライドブッカードをソードモードに変形させてモンスターたちに応戦する。

しかしながら相手をしているのはいずれも仮面ライダーの物語の終盤に登場する強豪ばかりだ。

グロンギのゴ・ガドル・バ、ドラゴンオルフェノク、スワロウテイルファンガイア。

他に仮面ライダーがいればファイナルフォームライドを使えるのだろうけれど今はディケイド一人きりだ。

ディメンションキックとスラッシュでどうにか三十体のうち二体を倒したけれどどうにも分が悪い。

次第に追い詰められていく。

ガイが満身創痍のディケイドをあざ笑う。

「そうとも、私は迷惑な存在なのだ。ディケイドよ、所詮お前は他の仮面ライダーがいなければなにもしない半端者なのだ」

「なぜだっ、なぜ……お前達には影響がない」

「ある人と契約を結んだのだ」

「なんだと？」

「ここに六芒星のマークがある女だ。褐色の肌をしていて銀髪だった」

自分の額を指さしている。

「トドメは私が刺してやろう——アポロチェンジ！」

スーパリアポロガイストの右腕は既に細身の剣状に変形していた。スーパリアポロマグナム
ディケイドは、ドラゴンオルフェノクに右腕、ゴ・ガドル・バに左腕を掴まれて引き起こされている。

スクルドと言えば、射撃モードのばんぺい君と格闘モードのシューグルの間で為す術も無く立ち尽くすばかりであった。

リンドのように鍛えているわけでもなく、ベルダンディーやウルドのような法術を使えるわけでもない。物質に直接干渉する法術は素晴らしい力なのだが、残念ながらいかんせんこんなことには経験が少なすぎる。

スーパリアポロマグナムの狙いがディケイドの顔に向けられた。

「さらばなのだ」

刹那であった。

『神雷怒涛！』

艶のある叫び声と共に天空より強力な落雷があった。

吹き飛ぶモンスター達。爆風があたりをなぎ払う。

煽りをくらってスーパリアポロガイストもディケイドも彼を押さえていた者達もろとも吹き飛んだ。

天を見上げたスクルドの眼に二つの人影があった。

「ウルド！キリコ義兄さんっ！」

「騒がしいわねえ、なんのつもりなの？」

腰まである銀髪と褐色のグラマーな身体を傍らの背の高い男性神に寄せている。

リンドと同じく青い髪、アイスブルーの瞳、鍛え抜かれた鋼の様な肉体を持つ精悍な男性神だ。

騒ぎをおさめるために攻撃法術を使うとはいかにもウルドらしい。手段と行動のエクステンジと称されているのもむべなるかな。

「えっと、これはその……」

スクルドは騒ぎのことを説明しようとして、そんな場合ではないことに気がついた。

「そそそ、そうよ、大変なのっ！ ウルドっ、お姉さまが！」

「お姉さまってこれのことかしら」

何も無い空中から黒っぽい物体が落ちてきた。

よく見ると人形で、よくよく見ると黒焦げになったマーラーであった。

眼を丸くするスクルドに嫌みたらしく。

「さっきのベルダンディーはこれの変身よ。見抜けないなんてあんたもまだまだね」

スクルドの顔が羞恥と怒りに真っ赤に染まる。おそらく一緒にいたのは使い魔の一匹だろう。

キリコがフォローを入れた。

「いや、こいつがベルダンディーから元の姿に戻るところを見たのは偶然だ。相変わらず詰め甘い奴だな」

氷のような口調もスクルドの怒りを冷ます事はできなかった。

よくも恥をかかせたわねと、既に瀕死のマーラーを脚でげしげしと踏みつけている。

起き上がったスーパーアポロガイストがいらだたしそうに地団駄を踏んだ。

「ええええいつ、邪魔をするなっ」

腕をあげると鈍色のカーテンの向こう側からモンスター達が現れた。

魔化魍のイッタンモメンの巨体が空中を舞う。バッドイメージが空を滑り、グロンギの究極体ズ・ゴオマ・グが旋回していた。その他にも数多くの空を飛べるモンスターが他力本願寺の上空を埋め尽くした。

空を飛べるモンスター達の群れはウルドとキリコに襲いかかる。

キリコとウルドは華麗に攻撃をかわしていた。

二人の動きだけを見ると息のあったダンスのようにさえ見える。
モンスター達を見据えるアイスブルーの瞳。

「降りかかる火の粉は……」

「払わなきゃならないわね」

ウルドが法術の詠唱に入る。

「空を駆け 大地をでいなし、大気を震う雷の精霊よ その最も大いなる力よ……」

イッタンモメンの巨体がウルドに肉薄する。

キリコが間に割って入った。

瞬間であつたが二人の視線が交錯した。

——気をつけて、そいつは。

わかっている——。

魔化魍に普通の攻撃は通用しない。

毎分七百五十〜千発の連撃の光弾がイッタンモメンの巨体に食い込む。

仮面ライダー響鬼の「音撃」と同等の力を持つ攻撃には魔化魍も吹き飛ばしかなかった。

ウルドの詠唱が続く。

「雷となりて我が手に集え 万物を打ち砕く力よ——激滅轟雷！」
目も眩む閃光と爆音。

空中にいたモンスター達はキリコとウルドによってすべて駆逐された。

もちろんキリコは巧みにレジストしている。

それも凄いが、本来対地である法術を対空に使い、地上には一辺の被害も出さなかったウルドの実力も恐ろしい。

本来のどうか士の知っているウルドなら、地上の被害など気にもとめずに使うはずだ。

スーパードロポガイストの左腕が上がる。

「お・の・れ！」

再び鈍色のカーテンの向こうからモンスターの軍団が現れた。

シーグルが風車のようにロッドを振り回している。
どんな仕組みになっているのかばんぺい君の両腕と両肩から撃ち出される砲撃は尽きることなく続いている。

しかし――

「これじゃキリがないわ」

地上でスクルドが空中でキリコが同じように呟いた。

「あいつを倒さないと終わりは来ないようだな」

「さっきの呼吸で行きましょう」

ウルドが詠唱する。大きな破壊力をもつ法術の詠唱はそれだけ時間にかかる。

キリコはウルドの詠唱の時間をカバーするのだ。

「わかった」

「狂おしき雷光、黒き天を白に染めて駆けよ――」

一級神の高等法術、「轟雷天烈斬」である。

「おやめなさいっ」

涼やかで凜とした声が他力本願寺の境内に響いた。

腰まであるポニーテールの長い髪。額の「現在」の紋章。

「この場でのこれ以上の争い事は私が許しませんっ！」

「お姉さまっ！」

「ベルダンディー！」

今度は本物だった。

服装こそ先程とまったく同じである。だからこそ違いが判る。

北欧美少女の清楚な可憐さとフランス美女の気品、一級神の神聖さを併せ放って輝いていた。傍らには同じく愛鈴がいるけれど、やはり先程の使い魔の化けた娘と比べると千倍も可愛らしく美しい。

モンスター達は彫像のように動きを止めている。

「一級神非限定女神のベルダンディーとして命じますっ！異世界よりの来訪者は直ちにこの場より立ち去りなさい！」

語尾が空に消えるのと同時に天に地に法術陣が描かれた。

空中にいたものは空中の法術陣に、地上にいたものは地上の法術

陣に向かい、次々と中に消えていった。

慌てたのはスーパァポロガイストである。

「なっ。なにをしている！ディケイドを倒せ！葬り去るのだっ！」

「どうやら自慢の部下たちに見限られたみたいだな、覚えておけ！俺はお前を倒す男、通りすがりの仮面ライダーだ」

スーパァポロガイストにもディケイドにも女神の声は通用していなかった。

交錯する二つの影。

ソードモードのライドブッカーとスーパァポロマグナムが撃ちあい火花を散らした。

キリコが地上に舞い降りる。

「こいつらには言葉は通用しないらしい」

圧倒的な神気が身体から噴き上がる。ベルダンディーとは明らかに異質の戦士の神気だ。

一瞬で収束した神気が爆発した。

「ギャラクシアン・エクスプロージョン！」

膨大なエネルギーの奔流が二人を吹き飛ばす。

星すら打ち砕く一級神の拳であった。

もちろん十分すぎるほど手加減はしてあるようで、ディケイドとスーパァポロガイストは、空中の法術陣の中に消えた。

キリコは自分の拳を見詰めていた。どこか苦悩のある瞳。

ウルドがそっと寄り添う。

「思い出したの？ファイアナのこと」

「……すまん」

「いいのよ、それでいいの。私はそんなあんただから好きになったんだから」

ウルドの手がキリコの手に重なった。

ベルダンディーの傍らにいた娘が母親のスカートを軽く引っ張った。

「あの人可哀想」

屈み込んで愛鈴をベルダンディーは抱え上げた。

「……そうね。ディケイドがめぐる世界はどこか壊れた世界。正史には永遠にたどり着けない。それがディケイドの物語」

「世界の破壊者」ではなく「壊れた世界をめぐる者」それがディケイドだと。

D―来訪者 おしまい

D-1 来訪者（後書き）

作品中の「一級神特務限定キリコ」は我友I P S I L O Nさんのオリジナルキャラです。

ご承諾の上、使用させていただきました。
ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2351m/>

ああっ女神さまっ 「愛しき鈴の音」 外伝

2011年10月7日05時25分発行